



無断転載不可©IPAMIA 2023

IPAMIA Oral History Project 2022

Part2: 西島一洋氏 1952年12月20日生まれ

インタビュアー 山岡さ希子 (IPAMIA メンバー、アーティスト)

瀬藤朋 (IPAMIA メンバー)

インタビューをした日 2022年4月15日

場所 西島一洋氏の元自宅 (北名古屋市、現在は倉庫状態になっている)

<目次>

1. 子供時代～結婚まで p.1
2. 名古屋の芸術家の人々、林くんとのお会い p.15
3. 「体现集団φアエッタ」結成 と《浅井ますお追悼儀式》 p.24
4. 鉄球と《彷徨変異》 p.38
5. 生活と労働 《原記憶交感儀》 p.44
6. 「NIPAF」との関わり、海外での発表 p.57
7. 《非殺生沈思冥想行為》《音採集行為》《六四追悼儀》 p.63

1.子供時代～結婚まで

山岡:ご両親の事とか、ご家族のこととか、子供の頃の記憶とか、お話になりたい事を話して頂けたらと思います。1952年生まれですよ。

西島:1945年に戦争終わって7年後、割と戦後まもなく生まれとるんだよね、僕は。キューバ危機(1962年)の時、うちには、まだテレビは来ていないから、ラジオで聞いた。キューバ危機という言葉の意味もまだよくわからなかったけど、もうすぐ戦争が始まるかもしれないということになっていて、僕は本当に怖かった。キューバ危機というのは、要するに、キューバにソビエトがミサイル基地を作って、アメリカとの全面戦争が始まるかもしれないという危機のことだ。それが、その一晩で、今から戦争になるかどうか決まる、本当に怖い怖い時だった、それは強烈に覚えている。うちは、うどん屋だったんだけど、家族みんなでそのうどん屋のラジオの前に集まっていた。夜中じゅう起きとったのかどうだか覚えてないけど、そうだ

ったような感覚があつて、それがずっと忘れられない。2001年の9.11の時に、やはり、テレビの中継にかじりついたけど、その時の感覚とよく似とったな。

山岡:キューバ危機は、1962年で、西島さんは12月生まれだから、まだ10歳なってないですね。

西島:10歳というと、小学3年生くらいかなあ。で、結局は戦争は、回避できた。子供だったから、詳しくはわからないけれど。とにかく、戦争というのは、そんなふうには僕にはそんなに遠いものではないという感覚がある。当時の家は、千種区春岡通7丁目にあった。そこから歩いて15分か20分ぐらい、名古屋の中心地の栄(さかえ)寄りというか、街の中の方って言うか、そんなには遠くはないところに、いわゆる焼け後、つまり戦争中に爆弾が落ちて、建物が瓦礫の山みたいになったままの一带があつた。それから、名古屋駅の方の駅裏の方へ行くと、バラック街というか、残材で作った街がバーっと広がって、そこあたりは、闇市みたいな感じ。闇市って言うとおかしいかもしれんけども、一带がずっと、そうだった。今の新幹線口の方ね。新幹線が出来てからもう、全部変わっちゃった。新幹線が出来たのが、小学校6年生の東京オリンピックの時。そういう戦争の影というのは、今の人にはわからんと思うけど、僕の子供時代には、当たり前にも身近にあつたんだよ。

山岡:なるほど、様子がわかります。

西島:それから差別とか、そういうのも、けっこうあつたね。僕の父親はよく「朝鮮人」って言っていて、僕の父親だけじゃなくて、周りの人が普通にそう言ってた。子供たちも、「チョウセン、チョウセン言うなヨ、ワタシ日本来てから、15ネンなるヨ」と、訛りのあるの話し方をを真似て、冗談で言いあつたりした。だけど、友だちに朝鮮人の子もおつたからね。それから、部落のことで言うと、その瓦礫の町のちょっと横のところに部落みたいのがあつた。そこら辺の子たちとはあんまり遊んでない。

山岡:そうですね。

西島:夏休みは近所の友達7~8人と、千種区の市営プールに、よく遊びに行っていた。中学校1年生ぐらいの時、帰りに友達の1人が、15、6人のよその子どもたちにいじめられていて、僕がその友だちを助けたことがあつた。どうやって助けたかわからんよ、とにかく助けたんだな。その相手の子供たちの中には、中学生か高校生の、身体のでかい者もいて、高校生っていうよりも大人に近いような感じだったかな、いわゆる不良グループみたいな感じで、一見してすぐわかつたのは、彼らはその部落の子供たちだってこと。僕は、部落差別とかそういうのは感覚的になかつたけど、でも記憶としてすごくあるのは、その時、僕だけが、そいつらに一気に馬乗りにされて、集中して、袋叩きにあつたんだ。僕は、しばらく癒えなかつたほどの傷を負つた。心の傷も含めて。その一方的にやっつける感覚。何か、戦争って多分、そういう感じのことだと感じる。話が飛ぶようだけど、僕いっぺん警察に逮捕されたことあるのね。結婚してからだから、20代後半ぐらいの時に。オートバイが好きだったんで、古いオートバイなんかを拾ってきては

修理して、ある場所を何度も何度も往復したの。ところが、そのあたりで、警察官がネズミ捕りをやってたんだ。

山岡: その往復は、わざとですか？

西島: いや、知らなかった(笑)。スピード違反はしてないつもりだったんだけど、多少出てたんだろうね。止められて、捕まったのね。止められて、免許証を出したとたん、即逮捕！って。15、6人の警官が僕の横に突然、ばーっと現れた。その時、その子供の時のけんかを思い出したよね。

山岡: スピード違反ぐらいで？

西島: うわーっと僕を押さえつけてね、僕は何もやってないよ。反抗的に見えたのかな？

山岡: もしや、暴走族っぽく見えたんですかね。

西島: そんな格好してないね。オートバイも125CCの実用車で黒くて地味。そして逮捕されて警察署に連行され、後で女房が引き受けに来たよ。結果的には、警察官たちは、勘違いだとわかった。何日か前に、近くの派出所か交番に、爆弾か何か、火炎瓶かな？それが、何回か投げ込まれたことがあったそうで、その犯人ではないかと、思ったんだそうだ。でね、そういう上からのこの圧力、一方的な圧力、戦争というのはきっとそういう何か、相手に有無を言わせない、なんか突然、ばーっと押し寄せて、ぐちゃぐちゃにしていく、そういう感じに思う。

山岡: 誤解だったんですね。ひどいですね。

西島: そして、その時、子供の時の喧嘩がトラウマみたいに思い出されたんだ。警官にやられた時は、僕も大人だったから、割と平気で、むしろ「何だ？お前たちは」っていう感じでいられたけど、その時のなんか独特のね、なんて言うのかな、あの感覚、突然グシャッとこうやられるっていうかね。いわゆる暴力だと思ったね。何か、受けた側にとっては、なんともちょっと言葉で言いようがない理不尽な気持ちになった。戦争って、そんな風ではないかと思う。

山岡: うーむ。なるほど。

西島: で、今、何を話してるかという、子供の時の心の傷と、育った環境について。うちがものすごい貧乏で、家の近所もみんな貧乏で、うちは、それでもうどん屋だったから何とか食うことはできるけど、まわりには食えない人たちもいっぱいいた。大人になってからわかったことなんだけど、向かい側に住んでいた、たけちゃんのこと。たけちゃんの家は、傘の修理屋さんだったけど、傘の修理しているとこ見たことなかったのね。たけちゃんは、同じ学年で友達だったから、小学校の時は遊んだけど、中学の時は、たけち

ゃんが違うところに引っ越して、結局死んじゃった、多分、栄養失調でね。たけちゃんが引っ越したときは、僕らは小学校6年生の時で、何人かの幼な友だちと、たけちゃんの家へ遊びに行ったのね。基本的に何も無い、あばら屋というか、その残骸というか、そんなところ。中入ると、床がなくて、土間みたいなところに直接畳がそのまま敷いてある感じ、トイレは家になくて外にあって、そのトイレも扉がなくて、甕がポンと置いてあるだけでね。そういう家だった。そこに遊びに行くっていうのが、僕らには探検みたいな感じで、みんなで見つけたのが注射針。注射の針の先の方だけをたくさん落ちてて、みんなで拾ったのね。今どきの人は、昆虫採集って知らないかもしれんけど、注射針と防腐液がついた昆虫採集セットっていうのが、あったのね。で、その針は、それに類するもんだと思ったわけね、僕たち中学生は。だけど大人になってから考えるとそうじゃない。薬の……

山岡:ヒロポンとか。

西島:うん、大人になってから気づいた。子供の時はいいなあ、いいなあと、みんなでね、針をいっぱい拾い集めた。どうもお母さんは売春婦だったみたいね。後で考えると、つじつまが合うのね。男の人が何人も出たり入ったりしてたから。

山岡:そうですね。だから、傘は修理してなかったんですね。

西島:それから、うちのすぐ家の裏側のカメイさんとかいうところは、とにかく、この部屋(6畳間くらい)の倍ぐらいのところに、10何人住んどったかな。家族は、おばあちゃんと、イサムと、キヨシと言う男の人と、奥さんと子供がたくさんおった。おばあさんは流しの三味線を弾き。イサムというのは、酒ばっか飲んでね、何もやってない。一方、弟のキヨシっていうのはけっこう働き者でね、大工やってて身体が、でかかった。そして、いつも僕の家すぐ横で、イサムとキヨシは、殴り合いのけんかをしてたね。キヨシの方が身体がでかくて力が強くて、イサムは、コテンパンにされてた。そういう血だらけの風景というのはよく見てたね。

山岡:血だらけ! その時は西島さんは何歳ぐらいですか? 西島さんには、ご兄弟いらっしゃるんですか。

西島:僕は、小学生。2つ違いの姉が上と、下に4つ違いの弟が1人、3人姉弟。姉は50歳になる前に、癌で死んだ。演劇やとった。中学生日記って知ってる? NHKのあれに、しばらく教頭役か何かで出てた。若い頃やけどね。

山岡:やっぱり何か演劇とか、家にそういうものが好きな家風があったってことですかね。

西島:いや〜、特になかったと思うけど……う〜ん、だけど何かあったのかなあ。父親はね、あまり父親のこと話したくないけど……要するに父親は酒乱で、外に出て会社作っては潰して、会社を作っては潰し

て…みたいな。発明家だったんだ。たまに帰ってくると、酒飲んで暴れて、ただでさえ貧しいどん家のどんぶりをぐじゃぐじゃに割ったりしてね。僕ら子ども3人が馬乗りになって、泣きながら、父親を押さえつけたりした。僕らが追っかけて行くから、屋根伝いに逃げたりとかね。

山岡：へ～。

西島：でも意外とね、それを不幸だとも思わなかった。周りでは、実際に、僕の友だちのうちのことだけど、お父さんがお母さんを殺した家もあったから。ハンマーでね。病気だったか、精神病だったかと思うんだけど。

山岡：西島さんのお父さんについてもう少しお話してください。

西島：お父さんの両親というのは、おじいちゃんの方が九州の人で、おばあちゃんの方が四国の人、駆け落ちして名古屋に来たらしいのよね。そこの経緯はちょっと曖昧なんだけど、とにかく、2人は最初、熱田に住んでたらしいのね。熱田というのは熱田神宮があるところ。おじいちゃんは、西島八五郎と言う名前で、書道の先生だったんよ。だけど40歳ぐらいで死んじゃって、おばあちゃんは、息子であるうちの父親と、父の姉にあたる女の子の2人の子供を抱えて、まず、八事(ヤゴト、名古屋市昭和区と天白区にまたがる丘陵地帯)へ引っ越して、峠の茶屋みたいなことやってたらしい。今、八事は、ハイカラというか、大学が出来たりしたんで、文教地区というか、若い人達の町みたいになっているけど、当時は、寺や墓場があって、家は1軒もないぐらいの寂しいところだったんだ。そこで、おばあちゃんは泥棒に入られた。で、物騒だからって、山を下りて、飯田街道の塩付って所へ引っ越して、うどん屋を始めたんだ。おばあちゃんの名前が、ツルヨなので、つるやという店。

山岡：なるほど。

西島：僕の父親は、かなり頭が良かったみたいで、いわゆる学業ができたタイプ。東京の物理学校って、今の東京理科大学の前身になるんだけど、そこに行った。けど、在学中、徴兵されて陸軍中野学校に行き、軍隊へ。本人は無線の仕事と言っていたけど、おそらく諜報員だったんじゃないかな。そして、終戦後、帰ってきて、最初は県庁勤めしながら、発明家みたいなことやってた。製塩器を作って、特許とったの。そして、その特許を売ったら、けっこうお金になった。何かこれでやってけそうだな、という感じがしたんだろうね。僕の記憶にある時は、「リズム社」って言って、レコード盤を作る仕事をしていた。録音屋さんね、テープレコーダーが出る前の。近所の人の声を吹き込んだり、僕の生まれた時の泣き声も録音してた。

山岡：へー。

西島：それだけじゃないんだよ。腕時計型のトランジスタラジオも作ってた。あとそれから、タケコプターじ

やないけど、あれも自分が発明したとか言ってた。糸とかこうやって、ピーーと飛んでくやつ。それはけっこう売れたみたい。竹とんぼじゃないよ。紐か何かでこうやって、ピューンと飛んでいくやつ。そういう技術的なことは得意だったけど、商売は下手だったんだね。たくさん不渡りみたいにつかまされて、ヤクザに追っかけられたりとか、借金してボコボコに傷だらけになって帰って来た事なんかもあったよね。

山岡:へ〜。

西島:さっき言ったその芸術性というのは、そこにあるかな。モノ作りというか。ようわからんけど。

山岡:お母さんの方はどうですか？

西島:母親は、もともと大阪の人で、母親の父親、おじいちゃんは造幣局に勤めてて、割ときちっとしていた。金持ちじゃないけど。本人はお嬢さん育ちみたいなのがあって、若い頃は、関西電力でタイピストとして働いていた。その頃多分タイピストというのは、女の人ではけっこう、花形職業だと思うんだけど。それから、結婚してこっち来てからは、おばあちゃんと、うどん屋を細々と一緒にやってた。その中で僕らが育ったという感じ。

山岡:なるほど。

西島:母親に芸術性があったかどうか、わからないけど、「ピカソの絵もいいのと悪いのってあるよね」というようなことは言ってたよね、僕が子供の時。作家の作品は全部良い、というわけではない、という事はよく言っとったね。ピカソの全集みたいなのが、その時うちにあったのかなあ、どっかで全集を見てそう思ったらしい。

山岡:そうなんですね。名古屋くらい都会なら、いい展覧会があったんじゃないですか？

西島:僕は、ピカソが死んだ時には本当に泣いた。嫌な泣き方だけど、ようやく僕の時代が来た！そういう錯覚というか。

山岡:ははは、面白い！

西島:本当にそんなドキドキするような感じがして。

山岡:いつぐらいから、絵描いたりしたんですか？

西島:絵描きになるっていうこと？ 絵はもう子どもの時から描いてた。

山岡:絵がすごく好きで、特別に好きで描いていたからこそ、絵描きになろうと思ったんですね。

西島:いや、うどん屋になると思ってたからね、子どもの頃はずっと。絵は好きだったよ。描くの、本当に好きだった。美術の授業なんかあると、僕速いものだから、速描きで、他のやつのも手伝って描いたりとか、何枚も描いたりとか。絵の好きな友達と絵を描き合って遊んだりとか、そういうことはよくやったけど。でも、一番のきっかけは、まあ、失恋でね。

山岡:えっ！そこをお話してください。

西島:高校の試験の時にさ。1回目の失恋は中学校の時。2回目は、高校の時の、試験の時にぱっと振り向いた姿にもう一目惚れしたみたいな。

山岡:はははは！！

西島:忘れられなくて、それでずっと想いが高まって。1年の時かなあ、いわゆる告白というのはをしたね。そして、付き合うことになったんだけど、僕は喋る事も出来ないわけ。一緒に歩いたりするけど、要するになんかこう、胸が高ぶっているだけで。だんだん相手は、何なん、こいつは、って思っただろうね(笑)。好きでも普通に話したりとか、そういうことができなくて、もうどうしたらいいか自分でもわからないぐらいドキドキしてるだけの状態っていうかね。

山岡:う～～ん。

西島:そのうちに、どうもあんまり良くないから別れましょう、みたいなことを向こうから言い出して。

山岡:えっ、そうなんですか。

西島:いわゆるそれが、最初だけども。でも、しばらくしてから、向こうの方から言ってきたのね。「もうやっぱりもう1回付き合いましょ」みたいなことを。でも、そういうのもやっぱり僕はもうだめなの。嫌いじゃないんですよ。

山岡:どうすることもできなかったんですね。

西島:そう、どうもできなかった。いわゆる「恋」という幻想に、恋をしたみたいな感じ。その人じゃなくてもよかったのかもしれない、今から考えるとね。おそらくはね、今から分析すると。だけど、その時はそういうふうには思わなくて、どう自分ではもうどうしようもない感じで。んで、その16歳ぐらいだと、その失恋の苦しさというのは、ものすごい、世界がなくなったような苦しさ、なの(笑)。

山岡:うわ～。

西島:でね。そのころは、美術館に通っていたわけじゃないけど、愛知県の、今は美術館のところ、まだ当時は文化会館で、その中にギャラリーがあって、それを僕らは美術館って呼んでいた。正式には美術館ではないんだけど、「県美」とは言われてて、所蔵品展というのがあった。いい加減な所蔵品展で、要するに何か、政治家っていうか、市長室に飾るための、そういう絵もあったわけ。ろくでもないようなものもいっぱい。いわゆる学芸員がチョイスして選んで買ったやつじゃない。

山岡:なるほど。

西島:その中にイチノキケイジって人の作品、全然無名の人よ、本当になんていうか多分、後期印象派ぐらいの感じの、ボテボテとした絵で、ランニング姿の小学校1年生ぐらいの子供が、縁側から部屋の中を覗いてるといった感じの絵があったね。僕はそれに救われちゃってね。

山岡:ほうう。

西島:いわゆる、言葉で言うとおれだけけど、多感なときだからね、感動して、もう体が震えちゃったわけよ、ブルブルブルブル。すごいなあと思ってね。その丸坊主の男の子が逆光で、部屋の中ただ覗き込んでいて、後ろに金魚鉢みたいなのがキラキラと輝いてるような、そういう、どうってことない絵なんだけど、僕はその時に感動した……そして、これは嘘だと思ってさ。

山岡:えっ？

西島:自分を疑ったわけね。要するにたまたま、そういう時だったんじゃないかと。相当何回もその絵の前に行って、僕の気持ちの本物かどうか確かめた。それと同じ頃にね、NHKで、15分か30分ぐらいの外国の短編映画やってて、全然売れない絵描きの主人公が、夢の中で見た女の人の姿を描いたら、いちやく評価されたというか、有名になったというか、そういう話だった。それがちょっとどっかでリンクしちゃったんだね、僕の中で。そして、もうその時点で、僕は今日から「絵描き」っていうふうに決めちゃったの。

山岡:ふ～む。

西島:そして僕は、うどん屋をやらずに、絵描きだっというふうにした。一生絵描きという職業になる、と。その思い方というのはちょっと極端かも知れんけど、それが16歳の時で、それからはもうただ、ただ。だから、そこから僕の言っとる「極私的絵幻想」というのが、作られていくわけね。

山岡:極私的？絵幻想？

西島: そう。いわゆる共同幻想というのは、みんながお互いに納得し合いながら幻想として成立するわけでしょう。例えば日本の国だったら、法律とか、なんでもそうだけど。

山岡: お金はありがたい、とか。

西島: お金もそう、紙ぺらだけど、これは何かあるもんだって皆が思うから、あるもんだというふうにお化けだって、みんながいると言えはいることなっちゃうし。だけど僕の場合は、そういったその……まあ、共同幻想という言葉は、吉本隆明が使っている言葉で、本にもあるように、いわゆる一般的な言葉といえは一般的な言葉なんだけど、そういうのとはちょっと違う、かなり自分の中での幻想というのが、作り上げられていくというか。

山岡: 基本的に幻想と思ってたんですか？ それとも、後から幻想だと？

西島: その時は、あまり幻想とは思ってないかな。そして、絵を描いていく上で、いろいろ勉強するわけね。一番最初にやったのは、図書館の画集を全部見てみる。そうするとね、だんだんぼんやりと、絵というのはこういうものかなんだかっていうのがわかってくる。もちろん石膏デッサンもやったし、いろいろやった。それから例えばエスキースとか、タブローの概念だとか、それから、なんていうのかな、枠のない絵だとか、いろんなことあるよね、現代美術の中で。そのうちに、そうやって勉強しても、そこからのずれっていうのが、あるわけね。

山岡: ふむ。

西島: これは「絵」だけど「絵画」ではない。「絵画」ではないとはっきりは言い切れないんだけど。とにかく、僕は「絵画」ということはあんまり使わないです。だから僕は「絵」と言ってる。

山岡: 西島さんの描く「絵」は、「絵画」じゃないかもしれないと？

西島: そういう歴史文脈的、論理的に積み上げてられきた「絵画」というのとは……ちょっとズレがありすぎる。

山岡: いろんな「絵画」を沢山画集を見て、「絵画」ってものがだんだんわかってきてたけど、自分の描いた「絵」は「絵画」とは言えないかもしれない、と。

西島: 簡単に言うと、そうだね。

山岡: 外れてると思うけど、でも自分はこれを描く。

西島:たとえば、今僕がやっていることも、はたから見ると、トラックの運転してるだけ、働いてるだけかもしれない(笑)。それ以上のものでも以下でもないんだけど。でも僕には、これが今、「絵」を描いてる「行為」なのね。それはだから言葉として、これ「幻想解体作業」の中の一つなんですよ。

山岡:はい……

西島:例えば「絵」とはどういうものか、というのは、例えば、具体的な空間のこととか、筆触の事とか、そういう実際のその技術的なこともありますよね。でも、それだけじゃなくて、例えば、ちらっと言ってみると……「命懸けで絵を描く」ということはどういうことか、というか、そういうようなこととかね。

山岡:へ～。

西島:今は、僕は「命がけで絵を描いてはいけない」と、思ってる。僕の友達での命懸けで絵に悩んで、海に飛び込んで死んじゃったやつがおるもんだから。

山岡:……………

西島:それは病気って言えば病気だけだね。その人は、画塾で、子供たちに絵を教えておって、その子供たちの絵を、車にいっぱい積み込んでね、そのまま海に飛び込んだの。彼は、愛知県立芸大まで行って、ちゃんと勉強もした人なんだけど。

山岡:プロフィールを拝見すると、西島さんは、「17歳から名称不能行為を続ける」ってありますが、これは絵も含めて、ですか？

西島:今は、その境界がないように聞こえるかもしれないが、当時は、「絵」と「名称不能行為」というのは、全く別個のものだと思っていた。

山岡:ええ、ええ。

西島:僕の子供の頃の「少年マガジン」って、今はどうか知らないんだけど、グラビアみたいなのが、表紙の次のページに何枚かあって、そういうところに、普通に、「行為芸術」だとか、そういう写真がよく載ってた。

山岡:「少年マガジン」にですか?! おっと!!

西島:で、そういうものが、世の中にあるってことは知ってたんだよ。

山岡:「ゼロ次元」とかが載ってたんですか？

西島:「ゼロ次元」は載ってなかったと思う。その頃の「ゼロ次元」の記憶がない。でも、その時の「行為芸術」っていうのは、もうちょっと街の中で何か暴れてるみたいな、そんなような感じの印象が強かった。なんか絵の具をばらまいたりとか……

山岡:もう1回聞きます。それは「少年マガジン」？

西島:そう。僕は今でもよくふんどし締めるんだけど、それは「少年マガジン」に載ってたからなんだよ。

山岡:「少年マガジン」って、漫画が載ってるだけではないんですね？

西島:漫画でも、漫画の描き方とかね、そういうのも載ってた。「少年マガジン」だったか、別のマガジンだったか、忘れたけど、水木しげるか、藤子不二雄だったかが漫画の描き方講座みたいのを連載していて、ギャグ漫画は3頭身で描くんものとか。ストーリーを考えるためには、たとえば電車に乗ったら、前に座った人を見て、どんな職業かとか、その人は朝起きてからどんなことをやったかいろいろ想像してみなさいとか、そういうようなことが書いてあったよ。「少年マガジン」には、そういうコラムみたいなのがいろいろあって、他にも学んだこといっぱいあるよ(笑)。ふんどしなんかの締め方とかさ、漁師の締め方とか、山の人の締め方とか、そんな、いろんな技術的なこととかね。今の「少年マガジン」は少年漫画だけなのかもしれないけど、僕の子供の時は、何かおまけみたいのも付いてたりしたなあ。

山岡:漫画もあり、いろいろな読み物もある、つまり、少年雑誌みたいな感じなんですね。「少年マガジン」だから。

西島:小学館が出している「中学生1年生」とかも、そういうの、あったじゃないですか。ああいうところにも、たとえば、寺山修司が相談員みたいになっていて、子供からの投稿に、答えてくれたりとか、あったよ。寺山修司だけじゃないけどね。

山岡:なるほど。そういえば、わたしは「少年マガジン」を見たことなかったです。

西島:そういう欄はけっこうあったよね、その後もあったよね、所ジョージとかのコーナーとか。

山岡:ところで、西島さんの絵ってあんまり見たことないんですけど、パフォーマンス中に赤い点をパツパツって描く。あんな感じの絵なんですか。

西島:今は割と、そういう記号的な絵が多いね。

山岡:このプロフィールにある、高校生ぐらいの時の「名称不能行為」は、鶴舞公園とか、名城公園でやっておられますが、そこでは何を？

西島:高校のときは僕、柔道をやってたのね。高校2年の時にさっきの経緯で絵描きになったので(笑)、美術部にも入った。「名称不能行為」は、美術部の友達といろいろ何か、やったという感じ。

山岡:何したんですか？！

西島:今考えたらたわいもないことだけどね、街中で大声出して走り回ったりとか。面白かったのはなんだけ、小さい風船を大量に貰ったのね、貰ったもんだから、それを街中で寝転がって一つずつ上げていくとかした。一番、面白かったのはね、鶴舞公園のところだね、僕たちは、楽器、横笛とか縦笛とかで、会話をするというのをやってみた。会話を音だけでやる。適当な音を出すわけですよ。それは言葉じゃないんだけど。後でさっきやってた時、何話してた？って友達に聞いたら、意外に話が出来るんですよ！テレパシーみたいに。そういうのは、面白いので、よくやった。

山岡:何人くらいでやってたんですか？

西島:3人か、4、5人だよ。ボディ・ペインティングもしたかな。それは、学校祭で。

山岡:そんなこともしたんですか！高校生は違うなあ。

西島:ボディ・ペインティングをやろうと言って。男子はふんどしになって、女の子は水着ってことだったんだけど、当日になったら、みんな男子は恥ずかしがっちゃって、僕だけがふんどしだった(笑)。女子達は、水着になったので、傍から見るとなんかちょっと気持ち悪い風景になっちゃった(笑)。絵の具まみれになってね。

山岡:高校ってどこでしょう？

西島:僕は北高校、名古屋市。美術の先生が東京芸大出た人でね。安井曾太郎の生徒だったらしい。

山岡:プロテストソングも歌ったんですか？

西島:プロテストソングというのは、要するにフォークソング。今みたいな、路上のライブとかああいうのはちょっと違って、みんなで歌うの、反戦歌を。反戦歌を一人が歌い始めると、みんなで同時に歌うというか、そういう集会みたいながあった。フォーク集会というか。特にこの日にやりますよとかじゃなくて、だんだん人が集まってきて、わあっ〜となるっていうそういうやつですね。そういうのが、プロテストソ

グだったと思う。栄とか、そういうところで。

山岡:若者同士で、ちょっとやろうぜみたいな？

西島:そうね。時代がそういうふうだったってことなんだよね。僕らがそれを作ったとか、やったんじゃないくて、周りがみんなそうだったと。そういうところへ行くとみんながワーツと集まって、全然知らない人同士がね、一緒に歌ったりとか、大阪から来た人とかが野宿してたりとかね。

山岡:ふーむ。

西島:ヒッピーというほどでもないけれど、ヒッピー文化があった頃ね、昔。若い人たちの、全然知らない人同士が、そういうところで、お互いに突然出会って、交流していった。レコードとか、そういう機材も買えないから、みんな耳伝いか、ラジオとかで聴いて、口承で歌を覚えてた。大阪から来た人たちに岡林信康の歌を覚えてもらったね。ギターで、歌いながら。本人のコンサート行ったわけじゃないし、レコードで聴くことはほとんどなかった。歌の詞は、そういう時代の中の言葉ですね。プロテストソングって、そういうものだった。

山岡:西島さんは、そうすると高校出た後は、うどん屋を手伝いながら、画家になったって感じですか？

西島:流れから言うと、高校卒業して、高校の在学中から行っていた、YAG美術研究所というところ、山田先生という人のところに行った。当時はね、河合塾の研究所がまだなかったんじゃないかな。YAGと、あと昭和研究所とか、その二つぐらいしかなかったんじゃないのかな、名古屋には。YAGっていうのはけっこう、いろんな人が来ていた。名古屋駅の裏側の、亀島という所。

山岡:そうすると、もしかして、鉄球を拾うまでは、そんなにパフォーマンスとか行為を、そんなに意識してやってなかったんですか。

西島:前後するかな。どうなんだろうなあ、鉄球いつ拾ったのかはそれも曖昧なんだけど……。思い出すと80年代の……。始め頃かなあ。

山岡:あら。西島さんにとって、最も大事な、相棒である鉄球を、いつ拾ったのか思い出せないのは、面白いですね(笑)。いつの間にか鉄球と一緒にいたって感じですか？

西島:拾った場所は覚えてるんですよ。80年代始めだということはわかる。長女のあかねが生まれたのが83年なんで、あかねが生まれた時には……。まだなかったような気がする。

山岡:お子さんの成長が時間のものさしになっているんですね。結婚はいつですか？

西島:24歳の時だから、1976年だね。女房は25歳でした。

山岡:その時はもうガタガタにならないで、女性とお話ができたんですね(笑)。初恋の時は、お話も出来ないで、気持ちがいっぱいだったけど。

西島:そうです(笑)。でも、最初はやはり、緊張した。女房は、名古屋芸大には行ったんだけど、出会ったのは、彼女がYAG美術研究所に行ってるか、行ってないかくらいの頃だった。自主的な勉強として、高校の卒業生同士4、5人ぐらいで集まって、交代でモデルをやって、絵を描くというのを、やってた。順番に誰かの家に行ったりとかで。そんなある日、その後の女房の家で、彼女をモデルにして描いていた。僕はどっちかという、モデルが少しでも動くのが嫌というか、ちょっとでも角度が違うと、絶対いかん！というような、頑固なところがあった。

山岡:絶対いかん、のですね(笑)。

西島:その時に、彼女の肩をちょっと触ったの、違う！とか言って。その瞬間に、女性を意識し始めちゃった。それまでは、彼女のことは男みたいに感じてた。どっちかという男性っぽい感じだったから。でも、その時、彼女の肩が華奢なのを感じて、一気にもうドーンと落ちちゃったの、自分が。

山岡:ははははは！(笑)

西島:それもう、そうなる時と一緒で、もうワーツともう話も出来ない状態になっちゃって、もうこれはいかんなあと思いつつも、友達にどうすればいい？というふうに聞いたら…

山岡:相談したんですか！

西島:とにかく「好きだ」と、100回言えば相手も好きになってくれるからと。それで「好きだ」を100回言うことにした。まず一番最初は、直接は言えないから電話した。電話するときにはもう、今でも覚えてるけど公衆電話で、もう手がガタガタ震えてた。でも、それから、何とか付き合うようになった。今度はちゃんと話もできるようになったのは、絵があったからかも。

山岡:彼女も、絵を描かれるんですね？

西島:そうです、今描いてないけどね。僕はさっき言ったように、命懸けで絵を描いて、ほとんど、なんていうかな、今はちょっと違うんだけど、手を動かす事が絵を描く事だと思ってたんだよね。要するにこの描くという事で、もう病気のように描いていた、描いてないときはないぐらい。風呂入っても銭湯行って入ったら銭湯の友達を、手帳に描きながら風呂入って、身体を洗う。駅とか電車で待ってれば、ずっととにかく手を動かさず、家帰ってきたら、まず一番最初のマッチ箱があったらクレパスで描く。とにかく描いてない

といけない、みたいな強迫観念で、当然そんだけ描けばね、変な話、上手くなるわけですよ。模写とかもしたし、ロートレックの模写が一番好きだったけど。そして絵の具の使い方とかも、その模写とかするとわかってくるでしょう。

山岡:ええ。

西島:そういうので、僕が、彼女に、「講釈」垂れることもあったね。影の中に形が見えるようにする描き方とかさ、そういうような事とか。

山岡:ふむふむ。

西島:そうそう、「講釈」って「偉そうに」という意味で言ってる。あまり大したことはまだその頃は知らなかったんだろうに、でもやっぱりそうやって、伝えたいと思った。でも今考えると、余計なことだったと思うんだよね。彼女は学校関係の展覧会に何か出すことになって、絵を描いているのに、僕が気に食わないもので、手を入れたりした。でも、絵がだんだんだんだん悪くなっていた。その時に自分の言ってることだと、それは僕の絵になってしまう。そして、それは何か違うなあということがわかった。

山岡:大変でしたね、奥さんにしてみれば。

西島:同体というか、そういう感覚があったからさ、お互いにそんなに嫌な感じはしてなかったと思うけど、でも僕はこれはマズイなど。何か、どんどんどんどん歪めていくみたい。何かせつかくあるものを、なんか歪めて自分のにしちやうみたい。出来上がっちゃったものは全く違うもの。なんていうか、僕のものでもないし、彼女のものでもないし、あんまり良くないものになっちゃう。

山岡:う〜ん。

西島:まあ、そんな話です。

山岡:うーむ、それはちょっときゅんとくるお話ですね。

2.名古屋の芸術家の人々、そして林くんとのお会い

山岡:その高校生の時みたいな「名称不能行為」ではなくて、もうちょっと「行為」というか、西島さんのおっしゃる「体現」と呼んでおられるようなものを始めたのは、いつ頃からでしょうか？

西島:一番最初はね、やっぱり林くんとの出会いだね。「体現集団アエッタ」という活動を始めた。名前は、僕がつけたわけじゃないんだけど。

山岡:「アエッタ」を始めたのは、1988年になってますよ?そして、林さんに会うのは、80年代の中頃って書いてありますね。西島さんは、1952年生まれだから、30歳半ば過ぎるぐらいまでは、何か「行為」的なものは、そんなにしてなかったってことですか?

西島:してるんだけど。してるって言ったら、なんかおかしいけどなあ。どういふのを「行為」と言うのかあれなんだけど、意識的にはしてなかった。遊びというか、リクリエーションというかなんか、なんか面白いからやってた。

山岡:すると、「後天性美術結社」っていうのは、いつ頃のものですか? 林さんに出会う前に、名古屋で路上行為をしていた人たちですね。

西島:「後天性美術結社」は僕のじゃなくて、名古屋芸大行ってる3人がやってた。80年代中頃かしら。

山岡:中島智さん、落合竜家さん、原充論さん、ですね。その人達とは、どういふふうに関わったんですか。

西島:中島くんとは「日本アジア思想研究会」という読書会で、知り合った。その読書会の主宰は三頭谷鷹史という人。「8号室」の鈴木敏春とかも、参加していた。「日本アジア思想研究会」は、略して「シニア研」。なんで「シニア研」になるかよくわからないけど、おじさん達がやってるって感じなのかな(笑)。

山岡:そうなんですか(笑)。それらは皆、名古屋でやっている集まりですよ。

西島:最初の頃は、岡倉天心研究だったみたいだけど、でも、僕はその時は参加してないね、途中からなんで。とにかく参加したのは、僕らがやっていたミニコミ誌「ON THE BEACH」(1982~85)がらみになったかも。「ON THE BEACH」というのは、岡倉天心の文章に「浜辺にて」というのがあり、それからだった。僕がつけた名前じゃないよ。

山岡:プロフィールによると、「8号室」の鈴木敏春さんには、もう、72年には出会っているんですね。西島さんが20歳のころですね。この20歳の頃って、他にも、ゼロ次元の岩田信市さん、「PLAY」の水上周さん、「毒素体系」の三頭谷鷹史さん、つまりその「シニア研」をやった人にも出会っている。

西島:「8号室」は、長者町の古いビルの一室を、若い人達が共同で借りて、「8号室」っていう名前で定期的に展覧会やってた。当初僕はまだ「8号室」の人達と直接、知り合いではなかった。そっちは、当時は「ぴしっふる」という、ミニコミ雑誌を作ってた、取材をしたのがきっかけかもしれない。

山岡:「びっしぷる」と「ON THE BEACH」は、どう違うんですか。

西島:「びっしぷる」(1970～76)というのは、どう話すればいいのかな。僕の高校くらいの時は、ミニコミ全盛期。今だといわゆるFacebookとかそういうのに近いのかもかもしれない、もしかしたらね。当時のミニコミってというのは、主にガリ版刷りで作ってた。ガリ版ってわかる？

山岡:わかります。

西島:僕は、高校生ぐらいからそういうミニコミっていうのを作っては、さばいたりとか、やってたんだよね。仲間で原稿を寄せ合ったりしてるんだけど、いわゆる文芸の同人誌とか、そういうのとはちょっとまた感じが違ってたと思う。そして、僕らが18～20歳の頃に始めた「びっしぷる」は、文化全般。僕はその中で美術の担当しとった。その後に出した「ON THE BEACH」の方は、全体が美術についての情報誌。

山岡:どちらも、販売していたんですか？

西島:販売してた。普通の本屋さんに置いてくれたんよ。

山岡:「ON THE BEACH」の方は、全国購読なんですね。

西島:その後で作っていた美術読本の「裸眼」(1986～96)も、全国で売った。いわゆる定期購読という方法もあるけど、そうじゃなくて、あちこちに置きたかった。当時、美術手帖に年鑑というのがあって、そこを調べると、日本中の芸術系の場所の住所とか書いてあった。他にも、展評とかで、よく出てくるギャラリーを探したりとかして。そこで売ってくれませんかって直接、頼んだ。北海道から沖縄まであちこち。

山岡:積極的ですね。面白そうだし。

西島:本屋さんに置くのも、ミニコミブームとしては10年ぐらい続いたのかな。でも、作った人がね、置きっぱなしで回収にも来ないというのが続いて、本屋としては面倒くさくなっちゃった、と思う。きちっとそういうことをやれない人が、作っても2号か3号で終わって、そのまま置きっぱなしだとか。売れても、その回収もせずとか。そういうパターンが多かったみたいで、本屋さんとしてもやっとなんて。みんながもったきちんとやってればね、そういうのも根づいたかもしれない。本屋さんが直接そこで売ってくれるわけよ。今考えたらすごい贅沢だよな、出版社のルートを経ずに。野菜の直送ってあるでしょ？作った人がスーパーに持ってみたいの、ああいう感じで、直売コーナーみたいなのがあったの、本屋に。ミニコミコーナーというのが。名古屋駅とか栄とかの大きな本屋さんも、わざわざそういうコーナーを作ってくれてたんだよ。

山岡:良い時代ですね～。

西島:そういう意味ではね。で、その「びしっふる」というのを作ってる時に、「わっぱ共同作業所」というのが、当時名古屋の昭和区滝子町という所にあった。今も、どこかに移転して続いていると思う。そこは、身体障害者と健常者が、同じ地平で働きましようという、そういう考えのもとに、健常者と障害者の区別なく、一緒に働くそういう作業場だった。

山岡:その「わっぱ共同作業所」で、「びしっふる」を印刷したんですね。ガリ版ではなくて、印刷物にしたんですね？

西島:そう。ダイレクトオフセット印刷って言って、紙版のオフセット印刷。ガリ版の後、タイプ印刷という方法もあったけど、タイプ印刷はあんまりやってない。ダイレクトオフセット印刷とは、紙版の印刷って言うのはオフセットなんだけど、あの版をフィルムを通さずに……(笑)わかるかな。今みたいな直接コピーみたいにして判を作る、焼いちちゃって。僕らは友達と3人で「びしっふる考房」というのを作っていた。「びしっふる考房」の「考房」は「考える房」と書く。実際には印刷物だけじゃないつもりだったんだけど、結局、稼ぐためには印刷物をやろうってことで、名刺印刷からいろいろとやってた。

山岡:ビジネスにしようとしたんですね。

西島:ビジネス半分のビジネスだけど、要するに3人が一緒に飯を食ってくために何をやるかということ。そこに広告を載せて広告収入と、あと他にもいろいろデザインとか、いろんなプロモートして、いろんなことやろうとかというふうにやったけど、結局は印刷デザイン。版下作ったりとか、そういう仕事に終始しちゃった。3年ぐらいやったかな。

山岡:そうだったんですね。

西島:で、「8号室」の話に戻すと、その頃、その「わっぱ共同作業所」で、「8号室」の前身となる「喫茶木曜日」のハガキが貼ってあるのを見つけたというわけ。わっぱ共同作業所というのは、いろんな情報がある、名古屋の例えば「七ツ寺共同スタジオ」などの、印刷をやってたんだよね。だから、名古屋のアングラ文化っていうのかな、そういう情報が集まっていた。

山岡:名古屋のアングラ文化！ 面白そうですね。

西島:そこが、安い印刷所だったからね。そこで、「喫茶木曜日、あなたも来ませんか？」というハガキを見つけたわけ。企画は「名古屋美術家共同組合」って書いてあって、それも知らなかったの、なんだろうかと思って、その「喫茶木曜日」に行ってみたのね。喫茶店の名前なんですよ。木曜日ごとに集まるからって。行ったら何て言うか、本当に(笑)、何かこう、小難しい本がいっぱいあってね。

山岡:ふーむ。

西島:優しくはしてくれたけど、とにかく何ていうのかなあ。いわゆる学生運動崩れみたいじゃないけど。それから現代美術の…当時まだ「現代美術」という言葉は一般的じゃなかった、「桜画廊」ぐらいかなあ、名古屋では。

山岡:「桜画廊」。

西島:「桜画廊」という画廊があったんですよ。その頃の「現代美術」を、「美術手帖」がどの辺まで書いてたかは、ちょっとわからないけど。

山岡:「名古屋美術家共同組合」。組合なんですか？

西島:そういう名前がついてたね(笑)。若い人たちがね、20代前半の人が、僕と同じような年だね、何人ぐらいいたのかなあ、10人いなかったと思うけど……。「名古屋美術家協同組合」というのは、70年代の初めの頃からあった。

山岡:「びっふる考房」をやっていた1974年には、絵の発表もかなり頻繁にされていますね。

西島:絵は日記帳、自己問答だと思う。人に見せても見せなくても別にそれはいい。自分も自己問答なんで、何かが成立するとかしないとかではなく、一番客観的に見えるのは自分自身しかいないというか。良い悪いかっていうのは自分自身が一番わかっている。

山岡:自分自身で決めるべきと言うことですね。

西島:だから最初は、かなり頻繁に発表とかしたけども、あんまりしなくなった。今でもしてないことはないけど。社会性がないと思ったんですよ、絵は。

山岡:絵に社会性がないと？

西島:そういうものだというふうに思ったんだよね。結果的には、あるのかもしれないけど。だから、ミニコミはどうしても僕の中で必要だった。

山岡:あ〜、なるほどねえ。人脈を広げるのは、役立ってますよね。

西島:社会性を補填する為に、他の人と出会う必要があると思った。絵は、自分だけのものであり、そうでなければ絵じゃないと思ったんだよね。絵を通じて人と出会うということはできなくて、自分の中で何かやりとりする。籠るというかね。自閉的というか。

山岡:いろいろなギャラリーで、何度も、発表もしておられますが、絵では、何ていうか、コミュニケーションが不十分だと感じたんですか。

西島:なんで発表していたのか、今だにちょっとよくわからないんですけど。個展というか、それに幻想はあったよ、どっかに。展覧会というのに、コミュニケーションがないことはないんですけど…なんていうのかな………今はミニコミも、出してないからねえ。

山岡:ミニコミは、西島さんには大切な社会性のある活動だったと思いますが、やっぱり、80年代の中頃に、林裕己さんに会い、「アエッタ」っていうのを始めたことが、なんといっても、何ていうか、西島さんにとって、本格的な活動になってきたということでしょうか。

西島:そうだね。そこで上手く、切り替えることができると思ったわけね。それまでも、僕個人ではいろいろ行為というようなこともやってきたけれど。僕は、絵描きになろうとか思ってから、逆に、絵を描くのが嫌いになっちゃったんだよね。嫌いになるって言ったらおかしいけど、できれば描きたくない。そういう何て言うのかなあ。なんで絵を描くのか、自分でも分からんって事あるよね、今でもわからんのだけど。だけどやっぱり、絵描きっていうふうに決めたから、今まだ続いている。そして、林さんと、「アエッタ」を始めた時に、それこそ、自分の「仕事」というふうに、思えるようになった。

山岡:林さんとの出会いをお話してください。

西島:林くんはね、名古屋芸大の学生だったの。名古屋芸大で教えてた茂登山清文という人が、連れてきた。茂登山さんというのは、僕が作っていたミニコミ「裸眼」のメンバー5、6人いたうちの1人。そして、その茂登山さんが、林くんを僕に引き合わせたかったみたいで、僕んとこ連れてきたの、それが最初だね。彼はまだ、19歳だった。

山岡:林さんはパフォーマンスっていうか行為というか、そういうことをしてる人だったってことですか？

西島:うん、すでにやってたらしい。僕は知らなかった。僕より先に、やっていたんだよ。名古屋芸大に、さっき話に出た「後天性美術結社」というのがあった。名古屋芸大の美術学部の中の「美術部」(笑)。余談だけど、「美術部」ってクラブが、美大の中にあっただって、面白いでしょ。なぜ、クラブかというと、クラブだと部費が学校から降りるものだから、それを獲得するために「美術部」というのを作ったわけね。中島くんとかがそれをやっとして、その中で生まれたのが「後天性美術結社」。「後天性美術結社」というのは、1年ぐらいの間に80回ぐらいやったらしいからね、街の中でイベントを。

山岡:「イベント」ですか？おお。

西島:相当頻繁にやっみたい。僕は1回しか遭遇してないんですけど。名古屋にASGっていうギャラリー

があって、近くの駅からそこまでに向かう道筋で、何かごちゃごちゃやりながら、止まっては進んで、みんながぞろぞろついて行って止まって、というような。その時、浜島嘉幸さんっていう人に、初めて会ったんだけど、浜島さんっていうのは、舞踏家?と行って良いかどうかわからないけど…。

山岡:聞いたことのあるお名前です。

西島:水溜りで立ち止まっては、何かポーズっていうか、なんかじいっとするみたいな事をやっていたり、そういうのに、ゾロゾロついて行って。何か他にも色々やってたんだろうけど、あまり覚えてない。

山岡:それらに対しては、西島さんは見てるっていう立場ですか？

西島:うん、でも、1回しか見てない。その「後天性美術結社」というのが、ちょっと神話化されちゃっていた。神話化っていうか、そういう感じ。林くんは、実は、「後天性美術結社」のその現場は見てない。中島くんたちとしても1学年しか違わないのに、なんであんまり交流なかったのかよくわからないんだけど。中島くん達が卒業してから、その後に林くんが、1人で「後天性美術結社」を勝手に名乗って、何か展覧会をやった。

山岡:ほう。

西島:1人というか、実質は3~4人ぐらい、おっいたらしいんだけど。

山岡:中島さんたちが作った「後天性美術結社」を林さんが1人で引き継いだ？

西島:引き継いだみたい。勝手に引き継いで、名前も勝手に(笑)。

山岡:別に文句も言わない?っていう、何かやってるらしいよ、みたいな?(笑)

西島:その「後天性美術結社」の名のもとにやったのは、かなり大きい絵、自分のね、ちょっとあんまり言いたくないけど(笑)……なんかチンポがデカくなった身体があって、それは、図像的というか、記号的な絵なんだけど、そういう絵を発表してた。それとは別に、博物館の展覧会場の中に、空き缶を置いて、そこで何か、そこの中でウンコしたりとかね。

山岡:なるほど……………

西島:博物館を縄で全部くくって、それを引っ張ったりとかね。

山岡:博物館をくくって引っ張って動くんですか!?

西島:動かんけど(笑)。そういうこととか、何かエレベーターの中でお茶を飲んでたりとかね、開けたら。そういう何かハプニング的なことをしてた。あと、これ犯罪だけど、洗剤を、オートバイの後部座席から街中でばら撒くとかね。

山岡:そういうこと林さんが、やったんですね、すごいね。

西島:当時はなんか頭もモヒカン刈りでさ、暴走族みたいな(笑)格好だったね。

山岡:林さんって、西島さんより少し若いのでは？

西島:だいぶ若いよ。13歳くらいは、若い。

山岡:林さんに話を聞きに行きなきゃいけないかも(笑)。

西島:林くんが、なぜ僕に興味を持って僕のうちに来たかっていうことを、後で聞いた。僕は20歳ぐらいの時に、ゼロ次元の岩田信市氏のうちによく行ったの。夜中に集まってもいい場所だったの。僕はその頃、花市場で働いていたから、花市場に行くまでの朝まで、そこにおったりとかしてたんだ。知らん人がいっぱい集まってきて芸術論みたいなことをけんけんがくやってた場所なんだよ、質屋の2階だった。だけど、そこでは「ゼロ次元」の事は、ほとんど話に出てなかった。

山岡:そのころは、加藤好弘さんは、アメリカ行っちゃってたんですかね。

西島:そうそうそう。「ゼロ次元」の事はほとんど聞いてないっていうか、僕が行ったのはその「ゼロ次元」が、万博反対闘争をしたり、わいせつ物陳列罪で捕まって、その直後ぐらいだったと思う。岩田信市氏が、名古屋地方選挙に立候補して、レインボウ部隊と言ってたんよ。僕は、その時にミニコミの「ぴしっふる」に書くために、ただ何となく、面白そうだからということで、岩田さんを取材に行ったのが最初だった。美術の人かどうかもなんも知らなかった。

山岡:林さんにしてみれば、その、「ゼロ次元」の事を知ってそうな西島さんに、関心があったって事ですかね？

西島:僕が「ゼロ次元」に関わったのは、彼らの活動からずいぶん経ってから。その時は、ミニコミ「裸眼」の取材で行ったんだけど、他の美術雑誌は、ほとんど取り上げてなかったね、当時。

山岡:他の美術雑誌では、取り上げられてなかったんですね。

西島:美術としては、ね。スキャンダルとしては有名だったんだけど。だから、僕は一度ぐらいちやんとし

ないといかんなあと思って、加藤さんに原稿依頼したり、インタビューして、ゼロ次元特集というのをやったのね、その時色々資料も出してもらったりした。それをどうも林くんが見たい。

山岡:ふむふむふむ。

西島:だから、茂登山さんが林くんを単に連れて来たというより、どうもそういう事だったようだ。その後、林くんは、うちによく来るようになる。突然夜中に来たりするのね。家に戻るのが怖いからって。彼の自宅は、すごく荒れたところとか、お化け出るからって言うんだ(笑)。何ていうのか彼は、今、見ると温和だけど、その当時は、かなりこうなんか……………。

山岡:ピリピリしてる?

西島:というか、「んーん」と言う感じだったのね。

山岡:ところで、林さんと活動を始めた同じ年(1988年)に、西島さんは「アパートヘイト否(ノン)」の関わりもあったんですね? 1980年代の末頃というのは、世界中の何かが動き出す節目のようですね。

西島:そうだね、確かに、色々重なってた。アパートヘイトの件は、シニア研の三頭谷鷹史から、「美術手帖」にアパートヘイトのことを書いてくれという依頼があって、書いたのがきっかけ。その後、北川フラムさんから、名古屋でもやってくれっていうふうになされた。最初は、市民運動の人達を中心になってやるという話だったから、僕らが応援するみたいな感じで、考えてたんだけど、市民運動の人たちが、途中から折れちゃって。

山岡:ええ! そうなんだ。

西島:それで、僕が、名古屋の事務局みたいになっちゃってね。でも、あの時は本当に大変だったというか、お金も1日60万円出さなくてはならなかった。もちろん全部払わなくてもいいんだけどね。

山岡:えー!!

西島:僕のお金じゃないよ。僕の人脈の貯金を全部出して連絡し、賛同人って言って、カタログ1冊の購入と賛同金を受ける。1人5000円だったかな? 僕1人で50人ぐらい集めたかな。だけど、だからそういう貯金、ね。僕の頼みだったら、5000円ぐらいだったら、買ってくれるっていうような(笑)人に、声をかける。

山岡:さすがです、人脈。で、それはいい経験でした?

西島:あまり。疲れただけだった。

山岡:……

西島:でもね、疲れたことは疲れたけど、それなりに何かいろんなことはあったよ、なんだか。特に名古屋の場合は、まずその、北川フラムさんから受けて、その展覧会をやるだけでは嫌だになってというのがあったわけね。だから、1989年には「FROM OUR HEARTS」という別の展覧会を企画を入れた。そして、100人ぐらいの美術家に呼びかけた。それを、岐阜の美術館と新栄画廊でもやったんだ。それから、最終的に「国際センター」の集会所の下のところでもやったし、つまり3回ぐらい展示をやってる。つまり、こっち側の人たちも参加するというやつをね。

山岡:さすがです。しかし、100人集めるのは、大変ではないですか。

西島:横の繋がりみたいのがあったんですよ。僕がひとりで100人を集めたわけじゃないよ。名古屋芸大関連で集めた。100人集めるのに必死になったわけじゃないんよ。岐阜は岐阜で何かそういうグループというか、いわゆる団体とかじゃなくて、そういう横のつながりがけっこう、あったんだよね、何でもか知らんけど。大阪にも「散歩派」っていう、パフォーマンス・アートのグループがあったし。

3. 「体現集団φアエッタ」結成 と《浅井ますお追悼儀式》

山岡:では、林さんとの出会いの方に戻りましょうか。

西島:そして、何か一緒にやりませんか？ みたいなことになった。僕は、前から展覧会としてやろうと考えていた、アイデアがいっぱいあるんだよね、行為として。その中の一つに《蓑虫割皮の儀》というのがあった(笑)。古新聞を身体を巻いて、どういふふうに包むかは、あんまり考えてなかったけど、とにかく身体を包んで、その後、引き裂いて出て来て、その蓑虫の殻を、点々と並べるという、行為と痕跡っていうみたいなのが、アイデアとしてあったわけね。それを林さんに話したら、それやりましょう！ということになった。それが、1988年のことね。

山岡:いいですね。

西島:そして、ちょうどその時、さっき言ったその茂登山清文という人が、「現代美術のコスモロジー」っていう、すごくでかい展覧会に関わってた。名古屋市の新興文化振興事業団から、500万か、600万かな、もったかな、助成金もらってやった企画。後に、ボルタンスキーの展覧会なんかをやった場所が名古屋にあるんですけど……

山岡:あ〜！ありましたね。ボルタンスキーの展覧会は、1992年くらいかな。

西島: ICAというところ。今は多分ないですけど、もと織物工場のアートスペース。ボルタンスキーをやったときよりもずっと前の、86年くらいの場所が出来たばかりの時に、茂登山さんは、そこを使って、5人ぐらいで大規模な展覧会をやったのね。

山岡:ICAは、そんな前からあったんですね。

西島:茂登山さんっていう人のは……要するに、単純に言うと、勢いがあったのね、名古屋の現代美術で。彼は、名古屋の人ではなくて、京大の建築学科の出身で、元は関東の人。他所からやって来て、なんか突然バーンといろいろなことを名古屋に起こしたみたいな感じ。まず、名古屋芸大の造形実験コースっていう、今の芸大の先端芸術みたいなのを、茂登山さんが作ったのね。しかも、造形実験コースは、デザイン科。林くんや関くんは洋画科。何て言うのかな、今でもそういうのってあるのかどうかしらんけども、デザイン科の美術コンプレックスというのかな。要するに美術の人も、デザイン科は商業的だからって、少し下に見ちゃうような、なんか独特の気持ちがあるでしょ？

山岡:その茂登山さんは、だいぶ年上ですか？

西島:僕と同年代だと思う。茂登山さんは、そうして名古屋の現代美術を牛耳っていたわけね。「美術手帖」に連載もしてた。英語が堪能なので、美術手帖から依頼されて外国の有名な作家について、見開きの特集記事を書いたりしてた。だから、全国的にもその当時は動いてたんじゃないかな。そして、茂登山さんは、その1988年に新たに、今の北名古屋市の西春の銀行だった建物を借りて、新しいアートスペースとして「EDラボ」という場所を作ったのね。Eはエクスペリメンタル、Dはデザイン、ラボはアトリエ。そうして、「体現集団φアエッタ」の一番最初の活動は、その「EDラボ」のオープニングへの、殴り込み(笑)。どっちなかという、彼ら、林くんと関くんはね、そういうセンス。

山岡:西島さんそうでもないんですか？

西島:僕は、茂登山さんに別に何にも感情的なことは、なかったから、殴りこみとは思わない。茂登山さんが美術の世界で勢いがあるってことは僕もわかる。でも、学生だった彼らにしてみれば、デザインの一教授に過ぎないだろうとか、デザインの方の連中め！という気持ち、妬みじゃないけどね、あったと思う。結局、僕も一緒になって、やろうということになった。

山岡:なるほど、へ〜。

西島:僕らの方が本物の美術だ！みたいなさ(笑)、あったんだよね、心理的なものでは。だけど、僕はお互い尊敬をしたい。そういう気持ちはあっても、オープニングに殴り込みに行くって言っても、た

だ壊しに行くっていう発想はなかったよね。

山岡:うんうん。

西島:そうじゃなくて何か、何だろうなあれ。それでとにかく、飛び入りということかな。あつちは、福原隆造くんと、それから古橋栄二くん、椿原章代さん。それから、あと2人はおったと思うんだけど、そのぐらいで、それが、造形実験コースの第1期生なのね。彼らと茂登山さんとでEDラボを作った。そこに殴り込みに行く。

山岡:殴り込みって、乱入？ですか。「乱入」って言葉が、なんか男子で、パフォーマンスする人達にとっては何か、ワクワクする言葉らしいですよ。実際は、何かすごく暴力的なことをするっていう事じゃなく、勝手に入ってって、やっちゃうみたいな、そういうことですよ。何か、びっくりさせようみたいな。

西島:びっくりさせようという気持ちっていう感覚ではないね。なんか追い詰められたような。

山岡:もっと真剣な感じですか。

西島:うん、何か追い詰められて、これしかできないみたいな。ギリギリみたいな。

山岡:やったんですね。

西島:うん、そして、《蓑虫割皮の儀》をやった。関くんの家が、西春駅の近くの線路沿いにある、そこで3回ぐらいリハーサルしたかな？けがをしないように、と。脚立に蓑虫状にぶら下がる。

山岡:たしかに、西島さん作品らしいですね(笑)。

西島:(笑)そもそも、僕のアイデアだから。頭が下で、ぶら下がってた林くんが出てくるっていう、ただそれなんだけど(笑)

山岡:その時は西島さんはその装置の係だったんですね。

西島:まずね、関くんの家からそのEDラボまで、普通に歩いて10分位の距離を、林くんを装置と同体化した形で、移動するわけです。林くんは、ふんどしになってる。脚立に、林くんを自転車のゴム紐でにくるんで、ぶら下げる。林くんは、這いつくばってる。それを関くんと僕で抱えながら、あとの小道具類を脚立に乗せて、歩いて行ったんです。だけど、林くんは、移動するだけで傷だらけになってたね、すでに。コンクリートの地面で擦れて、血だらけなの。

山岡:なるほど、なるほど。

西島:僕は、値段の高い絵の具、コバルトブルーだったか忘れたけど、セルリアンブルーかな？イブ・クラインのブルーに近い色を、キャンバスに塗って、その面を内側にして林くんを巻く。つまり、キャンバスを切り開いた時に、そこから鮮やかな青が見えるというのがイメージだったのね。落ち葉も、表面に両面テープで貼った。で、EDラボの入口外で、林くんをキャンバスにくるんで、それを脚立にぶら下げて、僕と関くんの2人で、EDラボに運び込んだのね。EDラボの方では、もうオープニングは既に始まっている。

山岡:はい。

西島:会場は吹き抜けで高くて、そこで、みんながオープニングをやっている最中に、その真ん中に入って行く(笑)。その時会場で、何やってたか知らなかったんだけど、後から聞くと、福原くんが七輪でサンマを焼く「行為」をしていたという。

山岡:EDラボでもパフォーマンス中だったんですね。2つのパフォーマンスが混ざったんですね。

西島:うん、だけど、僕らは、他の人達は何やってるか目に入らんもん。興奮しちゃってというか、そういう状態じゃないというか。ぶら下がりながら、林くんが内側から、キャンバスを切り開いたわけね。その時に、足をブツ刺しちゃってさ、小刀で。事前に練習したんだけどね、何回も。でも血が、本当にぶーっと出てしまった。動脈切ったんだね、きっと。

山岡:へ〜〜。

西島:EDラボの人たちもすごいびっくりして、すぐに、包帯を巻いてくれた。ほんで、医者行こうかって言われたけど、まだやることがある、とかって言うんだよ。

山岡:…すごい。(でも、包帯はなぜ、あつたんだろう……)

西島:実はね、僕は、しっかり聞いてなかったんだよ。林くんも関くんも、それぞれ、その後にやることを決めてたみたい。僕は囊虫がかぼつと開いて出て、それでおしまいだと思っていた。林くんは、炭かなんか固い木炭みたいなもんを持ち込んでさ、炭を身体にバンバンバンバンぶつけてね、それでまた傷が付く、今度は体が真っ黒になる。EDラボは、ホワイトキューブみたいな空間なので、その真っ白できれいな壁に、林くんは身体をばーん、ばーんとぶちつけて、壁を汚して、真っ黒にした。

山岡:びっくりです。

西島:だけど、EDラボの人たちはむしろ心配して、怒らないんだよね。林くんが使ってたのは炭だけでな

くて、墨汁もあった。その日、椿原さんの大きな布の作品が壁にかけてあったんだけど、それに墨汁がかかって、汚してしまった。それでも、ラボの人たちは、それでも怒らずに林くんのことを心配して、とにかく救急車を呼んで、近くの病院まで連れてった。

山岡: いやー。

西島: 救急車呼んだか、みんなで運んだかどうか記憶は定かではないんだけど、近くの病院に運び込まれる時、僕はついていったのかな、ついて行かなかったすら、覚えがないんだ。一方、関くんの方は、何をやってたかという、きれいに掃除したんだよ、ラボの中を。

山岡: ほ～～。

西島: 掃除道具を持ってたのね。それをやろうと思ってたんだね、関くんは。それからもう、どういうことなのか、いまだに理解できんのだけど、きれいに片付けたゴミをまた最後に、ぱつーとばら撒いた。うーん、わからないでもないんだけど。

瀬藤: ばら撒くつもりで片付けたんですね。

西島: そうそう。それでもなお、EDラボの人は何も言わずというか、歓迎してくれるみたいな雰囲気があったもんな。

山岡: 歓迎してくれたんですか！

西島: 福原くんは、壁を汚したのに対しては多分怒ってたと思う。壁に絵を掛けていた椿原さんには、あとで僕が「そういうつもりはなかったんだ」って電話したら、「いいですよ」って感じだった(笑)。

山岡: 時代なんですかね。

西島: 林くんとか、関くんとかに対してすごいなんか、リスペクトがあったんだね、彼らは。

山岡: そうなんですか。

西島: そうでなければ、そんなの怒るでしょ、普通。

山岡: そりゃそうですね。

西島: で、その後医者行って、そしたら保険証がないから、そのお金も立て替えてくれたりとかさ。そもそ

も、保険証がないんだよね、林くん。その後、僕たちは関くんの家に戻って、休憩したんだよね。(笑)

山岡:(笑)

西島:大変なことになったねって言いながら、テレビつけたんだ。そしたら僕たちのやつが流れてるんだ。その時、テレビ局が取材に来てるんだけど、そのテレビ局は僕達が主役だと思って、僕たちのやつを中心に映像を作っちゃった。

山岡:「ハプニング」が、オープニングにありました、みたいな。

西島:まずかったなあとか、言った記憶がある。悪いなあという感じはあったね。

山岡:本当にEDラボの人は、3人が来るって事を知らなかったんですか？

西島:来るってこと？知らなかった。来る可能性があるとは、思ってたのかな？それからもね、古橋くんとか福原くんとか椿原さんと、林くんたちが、喧嘩してるわけじゃない、すごくお互いに尊敬し合ってるというか。

山岡:西島さんたちは、その時は、もう「体現集団 φ アエッタ」って名乗ってたんですか。

西島:どうだろうな。その時は名乗ってなかったような気もせんでもないけどなあ。

山岡:「体現」とも言ってなくて？

西島:言ってなかった気がするなあ。

山岡:西島さんはその時はその装置を作ったりとかしたけど、自分は自分の身体で何かしたりはしなかった感じですか。

西島:うん。何もしない。一緒にぶら下げていった。

山岡:いつ頃から、どんなタイミングで「体現集団 φ アエッタ」と名乗ったんですか。

西島:「体現集団 φ アエッタ」としてやったことはね、ものすごく沢山あるもんだからさあ、どっから、どういうふうにお話したらいいのかわからんだけども。……一番早いのはそれ。それから、その後、僕のアイデアじゃなくて、林くんと関くんのアイデアで、《尻プレス版画》っていうのをやった。

山岡:版画ですか？

西島:お尻で版画するから、《尻プレス版画》。

山岡:あれっ、フランス語か何かに聞こえますね(笑)。そういうのがあったんですか? 翌年の1989年ですね。

西島:そうそう、そのラボでの乱入の少し後ぐらいに多分、やったと思う。この《尻プレス版画》はね、ギャラリーの天井に滑車をつけて、ロープ引っ張って、上げ下げできるようにする。林くんは真っ裸。林くんは座布団の上に四つん這いになって、お尻に僕や関くんも絵を描く。もう1人おったかな。順番にやる。関くんは、ペペペっというかいわゆるドロッピングみたいなやつを描き、僕はあの当時ハッチングの仕事してたから、ハッチングをする。

山岡:ハッチングですか。くすぐったいかもしれない……

西島:すごい寒い時期だったんですよ。なのに、僕のハッチングはけっこう緻密で、かなり時間かかって、1時間ぐらいかかった。林くんの尻のところでやるもんだから、すごく寒くなっちゃって、ガタガタ震え出しちゃって、途中でやめたんですけどね。

山岡:それは墨か何かで描いたんですか?

西島:2色でやった。

山岡:描くの長い時間かけたら、乾いてプレス出来ないんじゃないですか?

西島:それはシュシュッと最後、少し濡らして、できるの。紙を濡らしておけば大丈夫だし。

山岡:紙の方をですね。それは、ショーとして、人は見るんですか?

西島:見る。絵を描いてるとこも見るし、こう林くんがこういう状態で(這いつくばる)、林くんはものすごい力あるから、ぐーっって僕らがこうやって持ち上げて、お尻からドーンと落として。モノタイプ1枚だけの作品。売れたよ。僕のは売れなかったけど(笑)。

山岡:西島さんも、お尻側をやった?

西島:やったよ。

山岡:売れた絵は、どこが違ったんですか?(笑)描いた絵が良かったんですか?

西島:売れたのは、関くんの絵の方ね、関くんの方が、ビビビューとした絵だから、それなりに味わいがあるけど、僕のは単なる線だから。

山岡:関くんが描いた林さんの尻プレスは売れたと。

西島:いくらだったかなあ。いくらかで売れて、山分けで僕もいくらかお金もらった。それから、描く方は、なぜか上下喪服で来るように言われたんだ。

山岡:なぜですか？

西島:知らん(笑)。

山岡:リーダー的なのは、林さんなんですか？

西島:その時はね。

瀬藤:なんか3人の関係っていうか、どういう関係で集団として動いていたんですか？

西島:あのね、集団っていう、概念がないんだよ。それで「空集合」の「 ϕ 」のマークがついてるの、「体現集団 ϕ アエッタ」には、僕らは集団じゃないんだよ。たまたまその時3人で、「体現集団 ϕ アエッタ」としてそのままずっと続けてるんだけど、林くんのいない時もあるし、関くんも途中からいないし、だけど……なんていうのかな、集団という概念がゼロ。誰がトップとかそういう発想がないんだ。誰が中心だとか。

瀬藤:へー。

西島:もうちょっと言うと、「体現集団 ϕ アエッタ」は、どっちかというと、「場所」であり、「時間」だった。だから、みんなに飛び入り大歓迎って、いつも呼びかけてた。ある「時間」に何かやるけれど、それを見に来る人たちを「お客さん」と呼ぶ、そういう視点がなかった。

山岡:ふーむ、面白い、面白い。

西島:来た人は何かやるかもしれないし、ただ見ることも「行為」だとていたけれど、例えば、《浅井ますお追悼儀式》の時は……

山岡:えっ？

西島:《浅井ますお追悼儀式》っていうのは、浅井ますおという人の追悼式。浅井さんは、1960年代くら

いの人。林くと話していると、話の端々に、その名前が出てきたんだよ、ひんぱんに。林くんそれ何？って聞いた。そして、ある時、いろんな人の話や書いたものから、浅井ますおの話題が、いっぺんに、ど〜っと、出てきたことがあった。

山岡: 誰ですか、「浅井ますお」って？

西島: 1960年代の半ば頃に、25歳ぐらいで海に飛び込んで頭を岩にぶつけて、それで死んじゃった人なの。(笑)

山岡: ……笑っちゃいけないけど。

西島: (笑) そういう人。みんなが、なんとなく知っている。でも、なぞの人。そんな人はそういないでしょ。それがね、どういうところに出てくるかというと松澤宥の自筆年譜の方にも出てくる。それから、水木しげるの「ねぼけ人生」という随筆にも出てくる。それからゼロ次元の加藤好弘のどこにも出てくるし、岩田信市のどこにも出てくる。

山岡: へ〜。

西島: それから、あと誰だったかな、それを言ったのは。とにかくいくつか重なったの、同時期に。ポコポコポコッと。

山岡: みんなちょっとずつ、知っている。

西島: だけど、それぞれすごい何か、強烈な印象があったみたいで。水木しげるは、浅井ますおという人が、夜中に突然、女子大生と一緒に2人で来て、「今から乱交パーティーやるんですけど参加しませんか？」と誘われたと、書いてるのね。

山岡: 謎のパフォーマンスアーティスト？

西島: 信州で空き缶を足にいっぱいくりつけて、なんか、儀式みたいなことをしたり。

山岡: 浅井ますおさんが？

西島: ガラガラカラカラ音を立てて、瀬戸の川の中で歩いたり。ヨシダヨシエの文章の中にも出てくるよ。瀬戸川という小さい、どろどろの川がある。瀬戸物の陶器の町で、浅井さんは、岡本信也という人のと2人で川の中に入り、時計の解体をする行為とか。その時は警察に捕まったらしいけど。

山岡:なぜ、警察に捕まるんですか？

西島:よくわからんけどな。今でもあれだよ、警察に捕まるのは、簡単だよ。無視すると簡単に捕まる。僕も何回か経験あるけど、逮捕は無視されると、せざるを得ないんだ。だから、僕はちゃんと説明するもん、こういうことやってますよって言うと、そうですか、ご苦労さんですってことになる。

山岡:で、浅井ますおっては、人知る人ぞ知る人なんですか？

西島:いや誰も知らないんだよ。そうね、知る人ぞ知る人。僕らは全然知らなかったの、とにかく《浅井ますお追悼儀式》を1年に1回、計13回やろうということになった。意味なく(笑)。《浅井ますお追悼儀式》として、何をやるかは、先に何かを調べてからやるっていう方法もあるけど、誰もわからんけど、たまたま2人で話しとったら出てきたんで、とにかく、追悼儀式をやろうと。1990年のが最初で、92年、93年と……

山岡:ふむふむ。

西島:その追悼儀式っていうのは何をやってもいいっていう。まず一番最初にやったのが、天竜川の河口。すごく砂浜が大きくて。太平洋にポンと出たところ。そこに、流木がいっぱい流れ着く場所があるらしいんだよ。そこへ行くと、流木がいくらでも拾えるってことは、前々から聞いてたのね。よく現代美術の作家が、そこまでわざわざ拾いに行くくらい、有名な場所らしい。やったのは、11月1日。ちょうどその時、寒波が来てて、すごく寒かった。その時、「後天性美術結社」の原くんも一緒だったのかも。

山岡:ふむふむ。

西島:何人ぐらい、いたかなあ。僕の車で乗れるだけ乗って、10人までいかんけど、ギュウギュウに詰めあって。全然知らん人も来たりしたよ、「黄色原人」って言って、大阪の方から、ただ身体中を真黄にして塗ってただ立ってるだけの人。

山岡:「黄色原人」？

西島:僕もその人とは会った事がなくて、ただ、手紙とかでやりとりしてた。《浅井ますお追悼儀式》をやるから来ないかって呼びかけたら、来た。日の出から日没まで、行為をやりますよと。その間の何時に来ていいので、と。そして、「結界」を作ろうということになった。

山岡:結界。

西島:ただ、だだっ広くて何やってもいいんだけど、一応場所だけは作った方がいいということになっ

て、細い縄を持ってってね。ギザギザのやつ、紙の……………

山岡：神社とかにあるやつですか？紙垂(しで)のことかしら。

西島：うん、そうかな。ちょっと話は前に戻るけど、ちょっと理由を説明する。豊川というのは、豊田の田舎の方、そここのところに、ため池がある。そのため池の水は、豊川の市民が水道水として使う。ところが、その近くにゴルフ場が作られることになった。ご存知かもしれないけど、山というのは基本的に尾根を削ってはいけないのよね、造成するとき。あとは加工してもいい。でも、ゴルフ場というのはどういふふうに作るかという、ガバーっと尾根の内側を削るわけ。なんで削っちゃうかという、水はけを良くするために、砂を2mぐらい埋めるらしい。その上に芝生を植える。砂なんです、そんなもんだから雨が降ると、一気にスパアって流れて行っちゃう。つまり、危険だということ。で、実際に僕らが行ったときも、造成の途中だったけど、雨が降って、洪水みたいになっていた。地元の人たちが、美術家も含めて、反対の運動みたいなのを起こしたんだよね。

山岡：うんうん。

西島：で、呼びかけられたもんだから、僕ら3人で行ったのね。そこで何をやろうかって言って、その時、林くんだったのかな、誰のアイデアだか忘れたけど、そのギザギザのやつ(紙垂)をね、工事で伐採することになってた木に1本ずつ、「これみんな神様ですよ」という意味で、縄で縛った。そうすると、切りにくくなるはずだと。実際には切っちゃうんだろうけど、そうじゃないかということ。それで、いっぱいそれ作ったんですよ。

山岡：はい。

西島：自分達だけじゃなくて、その時、反対運動の人たちが5～60人いたかな、その人たちもね、喜んで、縄に縛るのをやってくれた。作るのは僕らでけどすね。

山岡：結界としての意味がわかりますもんね。

西島：うん、わかりやすいしね。紙も基本的にはなんていうか、合成物質が入ってない障子紙を使った。パルプだけど。そういうことには気を使った。そのことは、「美術手帖」の「展評」に、鈴木敏春さんが書いてくれたんだよ。小さくだけどね。それは、《浅井ますお追悼儀式》の少し前のこと。

山岡：「行為」ですね。

西島：それで、ギザギザのやつを、結界として作ったのね。《浅井ますお追悼儀式》の時も。結界の真ん中、上の方に、でっかい流木で造形物を作ったの。展望台みたいなのを。かなり高いところにね、流木

のでかいのを上げた。けっこう、でかいんですよ、それをみんなで縄でくくって、塔みたいなのを作って、一応ここを中心としよう。午前中にそれを仕上げた。それから、みんな適当に何かやろうということで、勝手になんかやったって感じですね。

山岡: 一日きりのイベントですか? 「黄色原人」も何かしたんですか。

西島: 「黄色原人」はね、どっちかという、かなり来るの遅かった(笑)。暗くなる寸前ぐらいに来たかな。

山岡: そういうような活動の記録を、林さんと一緒に作るって言っておられましたね。

西島: うん、本当は作る予定でね。

山岡: いや、やってくださいよ。全く知らないし、っていうかそのあたりの人なら知ってるかもしれないですけど、私は全く知らない話なんで。とても興味がありますよ。

西島: 面白いと思うけどね。「浅井ますお」については、福岡アジア美術館の黒ダライ兒(黒田雷兒)さんが資料を求めて、僕らの所に来たことがあるよ。

瀬藤: さすがですね、黒田さん。

西島: 加藤好弘にも問い合わせたらしい。その時は加藤さん、アメリカだったかな、日本にちょうど帰ってきたのかな。そのときに、加藤さんが、僕にも浅井ますおの追悼号を送ってくれた。「ゲゲ」っていうミニコミを出してたんだ、浅井ますおは。

山岡: 「ゲゲ」?

西島: 「ゲゲ」っていうガリ版のミニコミのやつ。そこには水木しげる論っていうのも書いてあって。

山岡: 水木しげるが浅井ますおの事を書き、浅井ますおが水木しげるの事を書き。

西島: 浅井ますおは、水木しげるの事をすごく尊敬しとったわけ。

山岡: 加藤さんにとって、浅井ますおさんは、かなり近い、大切な知り合いだったんですね。

西島: そう。年は、ちょっと若い。浅井ますおは、松澤さんのうちにも突然会いに行ったことがあるらしい。そして、松澤さんの近くで展覧会やったのかな? そしたら講演者名が松澤宥になっとった。勝手に書いてる。

山岡:勝手に。

西島:松澤宥に対しても、その当時、何か近いもの感じてるんだよね、浅井ますおは。あと、鶴見俊輔の「思想の科学」にも……

山岡:出てるんですか？

西島:「思想の科学」っていうのは、全国のあちこちでその分科会というか、思想研究会みたいのが、あったんだよ、60年代当時。で、名古屋分科会を、浅井が中心にやっていたみたい。

山岡:浅井ますおさん。

西島:彼は、相当頭が良かった人らしい。住んでるところは、どこまでが本当かと思うんで………ちょっとわからないけど一応、僕の知るところで言うと、瀬戸の掘窯の窯跡に住んでいた。

山岡:う～～、伝説ですね。気になってしょうがない。

西島:全国の、中学生の家出少女たちと一緒に暮らしてた。

山岡:うそでしょー。

西島:子供が好きだったらしい。いやかなり信憑性あるんすよ、三池炭鉱をご存知？60年代に労働闘争があって、炭鉱夫は、貧乏で生活が苦しいし、ものすごくこき使われてたのね。労働闘争で親たちはみんな外出するでしょ、そのときの子供たちの面倒を見るために、わざわざ三池炭鉱まで行ったりしてた、浅井は。それから、全国無銭旅行とか。大根食いながら水木しげるのところに、出没したりとかさ。色々、逸話ありすぎるくらいある。

山岡:(インターネットでサーチする)さすがにない、ググっても、出てこない……

西島:浅井ますおが死んだ時に、加藤好弘が、その「ゲゲ」っていうの、最終号出したんですね。原稿が既に集まってたもんだから、それでそれにプラスして、だからそれが、けっこう一番内容濃いか、最終号は。

山岡:「ゲゲゲの鬼太郎」？

西島:だから、それはまず間違いないと思うけど、「ゲゲゲの鬼太郎」は、浅井ますおの「ゲゲ」から来たと、僕は思う。どこかの文献にある。少なくとも水木しげるは、浅井ますおのゲゲっていうのは知ってるし、

そもそも、それまで「墓場の鬼太郎」って言ってた。浅井ますおと出会ってから「ゲゲゲの鬼太郎」になった。

山岡: はい、はじめは「墓場の鬼太郎」だったというのは、聞いたことがあります。

西島: それから、浅井ますおは、「尖底点」というミニコミを出してる。尖った底の底と言うような意味。ゲゲというのは、そういう意味合いだと思う。底辺の底辺。

山岡: ……、下の下(ゲのゲ)。

西島: 多分、生きとれば、天才の方じゃないかな。絵もかなり良い絵描いてる。

山岡: だから、死んじゃったのかもしれない。

西島: その後ね、今から5年ぐら前かな? 県美でね。何かやったんだよね、名古屋アートルリ…なんとかというので。

山岡: 愛知トリエンナーレ?

西島: それじゃない。名古屋なんとかトリニクルなんとかなにかっていうので。

山岡: あったー! インターネット上に、「浅井ますお」。現代美術、反芸術パフォーマンス。そうか、反芸術パフォーマンスの中に、あった。ひらがなですね、全部。「あさいますお」。57~70年代までの間……黒ダライ児さんの「肉体のアナーキズム」の中に書いてあるようです。

西島: そうそう、つまり、黒ダライ児氏に、情報提供したのは僕の方です。

山岡: ネット情報によると、岩田信市氏のオーラルヒストリーにも書かれているようです。

西島: あ、ほんと? 知ってる人は知ってるってどうか。

山岡: 《浅井ますお追悼儀式》ってのは、本当に13回、やったんですか。

西島: 大きいのは、案内まで出してやった、大きいのは、僕の記憶では4回だね。だけどもっとやってるよ。やってるけど、その案内まで出してというか、沢山人が来てみたいな。その中の1つに《浅井ますお追悼儀式》の資料を置いて、お客さんが来たら、そしたらご飯いっぱい炊いて、それでめざし1本で食べてという、陰膳というか。

山岡:ふ〜む。陰膳ですか。「体現集団φアエッタ」は、どのように進めていたんですか。そして、どの頃から、だんだん、やらなくなったという感じですか？明確に終わりにしようと言った時期がありますか？

西島:まず、「体現集団φアエッタ」というのは、「場」なので3人でするもの、というわけではない。確かに初期は3人でやってた。その後だんだん、僕1人のこともあるし、「後天性美術結社」の落合くんや原くんが加わることもあったし。また、喫茶店で、月に2回第1と第3木曜日に6〜7人が集まって、アイデアを出し合い、それぞれ、好きなことをする計画を立てる、というやり方のこともあった。それは、互いに協力しあったり、しなかったり。名前を文字って、「ウラガエッタ」なんて、名乗ってる人もいたね。そもそも、「体現集団φアエッタ」で何かをする際に、参加するメンバーの名前は、匿名にしていた。そして、終わりっていうのはない。若い人が多かったよ、19歳とかね。林くんも関くんも、初めは19歳だった。詳しくは、僕が作って印刷しようとして、頓挫している冊子『体現集団φアエッタ 記憶のカケラ』に詳しいよ。

4. 鉄球と《彷徨変異》

山岡:ところで、「体現集団φアエッタ」の時に、鉄球は使ってたんですか？

西島:使ったよ。鉄球にさらしをつけて、みんなで引っ張り合うというやつ。あれ、けっこう面白くてね。「こっくりさん」って知ってる？鉄球には耳があるから、耳にさらしをくくり付けて、広いところで4、5人で引っ張り合う。引っ張って、絶対に鉄球が落ちないように引っ張り続けるということやっていると、とある時、誰かひとりがグッと動くでしょう。それとそれにつられて、鉄球がぐおーって動き始める、その時が面白かった(笑)。ただそれは遊びって言えば遊びだけど。《浅井ますお追悼儀式》の時にもやった。天竜川の時ではないけど。

山岡:鉄球について改めてお聞きします。は、西島さんにとっては、相棒でしょう？鉄球を拾った時期は曖昧ということですが、その経緯をけっこう、まとまった文章にされているんですね。

西島:と思うけども、どういう事を書いたか忘れた(笑)

山岡:その文章によると……福井の原発内の浜が美しいのでと友だちに誘われて写生会に行き、立ち入り禁止の場所に入り、そこで拾ったということ。漂着物だが、どこから来たかは不明。なんのために作られたものかも不明。当初は、放射能の汚染が気になったこともあり、5年くらいは鉄球を置いて「対話」をしていたとこと。その後、1988年に「アパルトヘイト否(ノン)」が名古屋であった時、西島さんが関連イベントとして企画した展覧会「FROM OUR HEARTS」に出したということ。それは、ご自分と等身大の人形をつくり、鉄球を抱えているというインスタレーションであったこと、それがきっかけで、鉄球との関係が変わった、ということなどが書いてありますね。そして、長野県の「飯田美研」の廃物の考え方が影響してい

ている、とも書いてあります。

西島:うん、あやふやになっちゃってるけど、鉄球はそういうきっかけだった。引っ張るつもりで持ってきたような気がする、引っ張ったら面白いだろうなあとか、思ったりしてた。あとは浅間山荘イメージもあった。でも、何か違うなあというのもあった。「飯田美研」の「物」に対する考え方を学んだ後、これは持ってたらいかんと思うようになり、海に返そうと思ったりした。そして、ちょうどそこに、アパルトヘイトの展覧会への参加があったので、その時にボンと置いたら、どうかと思った。そして、これ、感覚的なんだけどね、僕とは関係ないということがわかった。関係ないと言うのはおかしいけど。僕が鉄球を使うというより、どっちかという鉄球の側に居させて貰ってるというふうな感じかな。(笑)

山岡:その「飯田美研」の廃物の考え方、ちょっと語っていただけますか。

西島:「飯田美研」の人達が正確にそういうふうに言ってるかどうかわからんけど、僕が理解していることと言うと……

山岡:その前に、「飯田美研」とは何なのかを、話していただけますか？ 飯田って、長野県の飯田ですか？

西島:長野県の飯田で、西村誠英と言う人と、木下以知夫と、湯沢茂好かな。その3人ぐらいが中心メンバーで。もう1人、女の人で、その人忘れちゃった、名前出てこん。その人は版画家として、けっこうメジャーになった、探せば有名な人。そのメンバーで、元々は飯田の美術の研究所にみんな通ってて、芸大かなんか目指して、浪人時代を過ごして、何人かは大学行ったけど、その中心となる西村さんと木下さんは、大学行かずにそのまんま。西村さんは奥さんが電話交換手をやってて、西村さんは、これまで1回も働いたことがないらしい(笑)。絵を描く人。元々、北海道の出身で、なんで長野県飯田に来たのかちょっとわからないけど。木下さんは彫刻の人。

山岡:3人で何してたのでしょうか、展覧会とか？ それとも集まっているいろいろ話をしている？

西島:いつも会って、集まって話してたみたい。

山岡:それに参加した事がありますか？

西島:ある。飯田まで行った。林くんも行ったことある。なんかどっかの古い公民館みたいな所で寝泊まりしながら、夜中徹して、話を進める、みたいな事。「有限物界」についてとか。彼らの言葉は、造語が多い。なんかねえ、難しいこといっぱい言って、頭が痛くなるぐらい難しい(笑)。勉強してるしき、哲学とか。

山岡:そこで聞いた事を、西島さんが解釈すると？

西島: 僕が解釈するには、「もの」は、みんな人間が作ったもの、作ったり加工した物。目の前にある物、ほぼ100パーセントに近い位、人間が作ったものでしょう？これもこれもこれもこれもこれもこれも。彼らが言うには、例えばそのどれかをゴミとして出すでしょ。そうすると、その中にあった「物」が持っている「物力」が、人間の抑圧から解放されて自由になるという考え方。

山岡: ふむふむ。

西島: 「物力」は、初めて開放されて、力を発する。ここの中で、単にたとえば、こうやってコップがコップとしてあるうちは、その物力の力が抑圧されて、閉ざされてると。閉ざされた「物」の「物力」は、ゴミとなった時に、それが自然物になるって言ったらかわいけども、開放される。そういう考えなので、リサイクルの発想がないの。

山岡: ふむ(笑)。

西島: ジャンクアートとは違う。ジャンクアートというのは、ゴミを拾って来てまた再利用して、またアートの名のもとに使われると、また抑圧する事になるわけでしょう。そういう事も出来ないわけね。とても難しい事やってる(笑)。で、西村さんっていうのは、メールアートをやってた。それで、いらなくなった紙を送って下さいって言って、送ってもらったいらなくなった紙を手でちぎって、死・死・死って字を書いて…

山岡: 死！

西島: その死っていう字のなんか上を書いてあるんだよね、なんかもう普通の死じゃなくて、何かマークみたいなのが付いている(笑)。

山岡: ………

西島: それをね、また、のりで貼り合わせて、結局再生したのかなあ？と僕は思ったんだけど(笑)。まあいいんだけど、とりあえずそれを切って細かくしたやつをまた貼って、それをまたタペストリーみたいのでっかい、だんだん増殖していくような何か作って、またそれを破ってまたそれを切って…そういう繰り返しのことをやっている。

山岡: その考えを、鉄球に当てはめた時、西島さんが今みたいな使い方してるっていうのは、すごい面白いなあと思ってるんですけど。

西島: うんうん……………鉄球は、あってもなくてもどっちでもいいというのは本来なんだけど、僕が逆に依存してるって言う感じかな。特に人前でやる時には鉄球があると安心するっていう。僕は何もやらなくても鉄球があるだけでね。様になるっていうか(笑)。1人の時ね。誰かとコラボしている時ではない時。

山岡:鉄球がやってくれている。

西島:けっこう、向こうからこっちに、何か、言ってくる感じがある。追悼をよくやるんだわ。病気を治してくれと言うのもやる。念じてやった。それは1人でやってるから、他の人誰も見てないし、やっぱり交感。

山岡:鉄球を通して、追悼するんですか。

西島:そうそう、その辺になってくるとちょっと「何とか教」みたいでちょっと嫌だけど(笑)。

山岡:でも、鉄球を再利用して美術にしてるっていうより、鉄球って言うもう1つの生き物じゃないけど、なにかの存在であり、西島さんが共に何かするっていう事によって、その鉄球「物力」は残されている事になっている、と理解したんですけど。

西島:うん。いいふうを考えればね。少なくとも僕が抑圧してる感じはしないので、というか、向こうからの方があって感じです(笑)

山岡:依存はするけれど、抑圧されるほど弱くない。

西島:でもね夢でね、鉄球がくしゃくしゃになってる夢みた事がある。最近ちょっと見ないけど何回かね、これが紙風船のように。

山岡:(笑)分身なのかな?

西島:クシャクシャってね。僕ね、あの鉄球について、何度か、インターネットで、調べたことがあるけど、どうもあの鉄球は類似したものが、見つからないの。なんかね、分からない。しかも、けっこういい鉄使ってるらしいんだ。というのは僕は知らないけど、鉄に詳しい人、昔の職人だった人に会ったことがあり、この鉄は3ミリ厚あるし、鉄にも種類があって、悪い鉄だと赤錆になって終わっちゃうけど、これは良い鉄だと。良い鉄というのは、不純物があるかないかのこと。鉄によって種類があるそう。運動場の鉄棒はずっと黒いでしょ、あれはけっこういい鉄みたい。1度、黒錆になるともうそれ以上錆びないんだって。

山岡:鉄棒の鉄の件、なるほどです。

西島:拾ってきた場所は海。海って塩気があるでしょ。それなのに真っ黒けだった。今はちょっと茶色くなってる。僕が、コロコロコロコロ転がした(笑)。だいぶ穴も開いたみたいだし。

山岡:そして、何度も、鉄球とパフォーマンスをしたって感じですか。

西島:パフォーマンスというのは、「絵画」みたいな物だよね。表現の1つの形態というか、表現というのはみんなが、何かそこに事があって、まわりがいろんな人が、同等に見れるというか。

山岡:ええ。なるほど。

西島:そういうのが表現だよね。だけど……自己表現を含めてね、自己表現というだけではないけど。作品とか、どうなんだろうなあ。うーん…そこんとこ、うまく言えんけどな……表現ではないって言うのはおかしいけど。表現でなければいけないという、抑圧は僕は受けたくないっていうか、逃げたいっていうか。

山岡:おー。

西島:なんだこれは大した作品じゃないんじゃないか(笑)?とか、そういうんじゃない。それよりも、僕には「もと」みたいな事の方が重要。「もと」というのは、自分がここで今何を対応して何をやってるかっていうのが、その先に何か……パフォーマンスという、大事は大事だよ、表現する事は大事だろうと思うけど。だけど、絵を描く事とか、いわゆる一般に歌う事とか、そういうその美術だとか芸術だとかそういう中の範疇。範疇というか、1つの表現、それは。

山岡:なんか、わかります。表現技術のジャンルの一つという。

西島:だからさ、美術もそうだけど(笑)……… 要するに、そこまで僕、きちんと美術のことを把握していない事は確かですね。全部が全部ね、だけどなんとなくだけど、そっちの抑圧の方が先に立っちゃうもんだから。

山岡:ところで、プロフィールに、1994年《彷徨変異》誕生ってありますね。

西島:うん、「彷徨変異」は、僕の造語だと思ったら、でも、調べたらあったの、広辞苑に。「彷徨変異」というのは、「突然変異」の対語(ついで)というか、生物学用語。「突然変異」というのは子に変異して生まれるということ。「彷徨変異」というのは、2つの個体が一緒に同じに生まれても、環境によってどっちかの方が成長の度合いが違って背が伸びたり、太ったりとか、変異してくのを、「彷徨変異」というんだそうだ。

山岡:なるほど?

西島:元はね、《彷徨変異》というの、名古屋の栄の方のASGギャラリー関係で開く野外展の宣伝のためにやったのが、最初。さっき話した太鼓の山田武司くんから、野外展の宣伝として、チンドン屋をやるから、テレビ塔の下に来てくれって呼ばれた。僕は賑やかとして、ふんどしして鉄球ひっぱってついていくよって言った。他にも音を出す人が3人ぐらい来て、チンドン屋みたいな音を出して、チラシ配るような事を言ってたのね。で、僕は言われたとおり、テレビ塔のどこ行ったんだけど、来ないんだわ、誰も。困

ったなあ〜と思ってね、どうしようもないなと思いながら、そこで、思いついて、さまよいながら変異するという「彷徨変異」と書いたんだね。これはもう、勝手に僕はどっか行くよって感じで、書き置きして、移動したの、鉄球を持って。

山岡:プロフィールに《沈沈鈍鈍彷徨変異》とある、これですね。

西島:鉄球引きずって、南に行くと、大きい噴水があるんだね。その辺なら、その太鼓の音がどっかから聞こえて、どっかで合流できるやろうと思って。でっかくて円い噴水なんだけど、断水というか、水が不足なのか、なぜか水が止まっとった。そこのところに、僕はただ居ただけなんだけど、なんか人がだんだんだんだん集まってきてさ(笑)、「何かやるだろう、やるだろう」と。

山岡:うんうんうん!

西島:で、何かやらなあかんのかなあと思いながら、最初はただコソコソしとったの。鉄球を持ってバチャンと水の中に入ったとか、外に出たりとか、あとは、遊びでいいかあと思って、鉄球を噴水の角に引っ掛けて、引っかかった状態で引っ張って、あんまり引っ張るとコロんと落ちるんだけど、落ちない状態を保ったりとかさ、そんなような事して、色々やとったのね。そしたら、ますます人が集まって来てね、300人ぐらいになった。

山岡:ははははは(笑)。

西島:人垣ができちゃってね。それで、これはまずいなあと思って、何かやるつもりでやってるわけじゃないって、そのへりのところに鉄球を置いて立とうと思ったんだ。

山岡:危ない。

西島:いや、立てるのよね、でこぼこなもんだからさ、けっこう安定しとるの。で、立とうと思ったけど、これはこのままた立ったら、絶対拍手が来るなと思って(笑)、やめた。

山岡:芸みたいになっちゃうから?

西島:芸かどうか知らんけど、絶対拍手来るのすぐわかったの。そういう目でみんな観とったから。それは覚えてる、それが《彷徨変異》のもと。

山岡:テレビ塔のところでは、《名古屋のゲゲゲ》というイベントもしていますね。

西島:名古屋ゲゲゲっていうのはね、三浦幸夫さんをみんながかついで、僕はふんどしだったかなあ。ど

うやってかついだのかな？なんかでかついだ。さらしでぐるぐる巻きにして、ミイラみたいにしたのかなあ。僕はふんどしで水の中に入った、ギターを弾いた人もいたかなあ。4人ぐらいで、テレビ塔の所から、愛知県の美術館まで南下するっていうやつ。その頃、園子温が《東京ガガガ》をやってて、僕はこれあんまりなんとなくピンと来なかったのね。

山岡:はい。

西島:東京はガガガだけど、名古屋はゲゲゲでいこうって(笑)。浅井ますおの、「ゲゲ」があるからね。「名古屋ゲゲゲ」っていうのは、ものすごいゆっくりした動きで、名～古～屋・ゲ、ゲ、ゲ♪って。確か3歩進んで2歩下がる。そういうあのステップでさ、あの担いでずっと、歩いて行く、ただそれだけのやつ。

山岡:楽しそうです。

5. 生活と労働 《原記憶交感儀》

山岡:ところで、話が急に変わりますが、西島さんご自身の生活の方はどうだったんですか？

西島:今だったら珍しくはないけれど、うちは、ほとんど女の方が外で働いきに出てて、男の方が家の事やって、子育てやってる。

山岡 :はい。

西島:「アパートへイト否」の国際美術展がらみで知り合った、中日新聞の記者がいて、世話になったというか、よくやってくれる人だった。その記者が、正月の新聞に、女の人の仕事を男の人がやり、男の人が女の人の仕事をする、というような特集を書くことになったんだ。たとえば、当時は、看護婦を、看護師と言い換えて、男の人もするようになったでしょ。そのテーマで、「主婦」ならぬ「主夫」について、取材をしようとしたんだけど、ことごとくみんな取材断わられて、それで困って、僕に泣きついてきた。しょうがないかと思って、取材を受けた。

山岡 :そうなんですな！主夫として。

西島:それがデカく載ってたのね、正月の中日新聞に。僕が絵を描いてる時とか、おにぎり握ってる姿とか、保育園に連れてってる写真とか。で、その記事をよく読めばね、そんなに間違いはないんだけど、パッと見ると、女房が何にも家の事をやってなくて、僕が全部やってるみたいなふうに、読めちゃう。本当は違うんだけどね、ほとんど僕は、おシメなんか、バケツの中に放り込むだけで、洗濯は女房がやってるし。

山岡 : そうなんだ。じゃあ完全な主夫ではないですね。

西島 : それで、それを読んだ女房の母親が怒っちゃってさあ。こんなの嘘だ！って。まあ、それはいいんだけど、その記事を読んだ、その時女房が事務として勤めていた学校の校長が感心しちゃって、「絵を買いましょう」ということになり、売れた。

山岡 : それで売れた、とは！ それが30万円で売れたという話のことなんですね。

西島 : だから、功罪というか、結果、良い効果あるよね。

山岡 : 西島さんは家事の全部じゃないけど、お子さんの送り迎えとかご飯作ったりとか、実際、ある程度は、主夫的な感じだったんですか？

西島 : ご飯もどれくらい作ったかなあ、覚えがないけど。でも基本的にはかなりやってたと思うけど。やってたと思うけど、何から何までは…やってない。

山岡 : 主夫だって胸を張れるほどではないっていう。

西島 : そうそう。

山岡 : あはははははは(笑)

西島 : だけどね、逆差別じゃないけど、白い目で見られることはよくあったよね、まずは保育園に行くでしょ。今は送り迎えお父さんもやってるけど、当時は、僕ひとりだったよね。一斉下校というので待っている。最初のうちは気になったけどね。あっちも始めは、「お母さんたち、入ってください」って言ってたんだけど、そのうち、「お母さんとお父さん入ってください」って言うようになったね(笑)。

山岡 : (笑)

西島 : いろんな事ある。トイレとかさ、まず赤ん坊のおシメを替える所は、今でも少ないけど、当時でも、女子トイレには、おシメ替えるところは、わりとあったのね。でも女子トイレにしかなかった。だけど、昨今は男の人のトイレでも赤ん坊のおしめ替える所は、ある所はある。

山岡 : 変化しましたね、では、西島さんはイクメンの走りですかね。

西島 : 走りと言えば走りだけど、でもちょっと恥ずかしいところも確かにあった。子供が小さい時、公園とかに連れて行くと、周りみんな若いお母さんで、僕はしかもちょっと年食ってからってこともあるけど、子

供だけ遊ばせといて、僕は遠くの方でじーっとしてた(笑)。お母さんたちには、なかなか交われない(笑)。

山岡:わかる気がします(笑)。では、トラックの仕事は、そんなに昔からやってるって訳じゃないんですか？

西島:トラックは62歳か63歳くらいからで、今は、6年目くらい。

山岡:その年齢から始めるには、あの大仕事は大変じゃないですか？

西島:そうですね。「労働について」という企画を考えていて、何でも良かったのね、仕事は。一番最初は「フジパン」の工場に行こうと思ったの。

山岡:「労働について」というのは、コンセプトが先で働き始めたんですね、それも面白いですね。ちょっと時代が急に現代になっちゃうけど、それ聞かせてください。

西島:要するに他の人はともかく、僕にとって、絵を描くっていうには「私的幻想」であるって言ったでしょ。その貨幣経済の中で、売らなければ絵描きではないとか、要するに稼がなければ絵描きではないというのは、僕はないと思ってる。だけど僕は働いてる。ずっと働き続けていたし、労働してきたと思うんだけど、それは世の中が強いから。要するに「稼ぐ」ということと、「働く」ということは、一般的な世の中ではイコールになってるのが現状ですよ。

山岡:そうですね。

西島:だけど僕は、働いてるというのを、意識的に持ち続けなければいけなかったという背景もある。その背景というのはさっき言ったみたいな、絵を描いて家において、何にもやってないというふうに思いたくない。そういう思いもある。仕事というのには、もうちょっとこう、ぼんやりとしたイメージとして、僕は、世間が言っていることとは、どこか違うもののような感覚がある。たとえば、子供の頃の仕事という考え方は、今と違って、いわゆる下町とか近所には、いろんなお店屋さん、魚屋があり、肉屋があり、それから鍛冶屋があり、時計屋さんもあり、豆腐屋さんがある、いろんなものがね、いっぱい普通にあったわけ。まだスーパーとかコンビニはなかったからね、市場というのはあったよ、公設市場っていうのはね。なんかそういうコミュニティというのが、あった。何か例えばこういう物を作ろうと思ったら、材木屋さんもあったし、金物屋さんもあったし、作るときには路上でのこぎり引いて、作ったりしたら、通り掛かりの人が、「ここはこういうふうにした方がいいんだよ」とか、教えてくれる。

山岡:なるほどね。ええ。

西島:そういう事があったのね、生活の中で。自転車のチェーンが外れたら、全然知らん人でも…昔はよくチェーン外れてたんよ。路上に出て、直そうとしてたら、「あれは、後ろいっぺん外して後ろかけてから前へかけると簡単に出来るよ」ということを、教えてくれたりとかさ、そういうことがいっぱいある。そういうのが、僕は「労働」だと思う。その人の得意なことをお互いにやり合う。これが出来る人の所に頼みに行こうとか。そういうことで、コミュニティが成立すればいいかなあと思うんだけど、多分そこでお金が間に介在するでしょ、今は。

山岡:必ずね。

西島:お金と関係なく、そういうふうに助け合いが出きるならね、僕はそっちが一番いいなと思う。ちょっとそれを、どういうふうに考えているかというと、飛躍するかもしれんけど、ぼんやりとしたイメージとしてはそういうのがあって、僕は「絵」はそういう中の1つの「仕事」だと思ってるから。その仕事っていうのは、楽しんでやる仕事と、苦しんでやる仕事もあるだろうけど、僕は絵を描く仕事は、苦しんでやる仕事だと勝手に僕は思い込んでいる。

山岡:ふーむ。

西島:なおかつ……………この辺になると、ちょっとうまく言えなくなってくるな…………

山岡:わたしも近いところにあるので、言えなくなるのは、わかります。では、とりあえず、今日は、どうしてトラックの運転になったか、聞きます。

西島:トラックはね、何でも良かった。フジパンの工具というか、とにかくフジパンの工場からは、断られてさ。年寄りだからかな。そのときに多分この日とこの日は休みたい、みたいな何か予定を、言ったからかもしれないけど。

山岡:そうかも知れないですね。

西島:それで、どうしたのかなあ、その後、近くの廃品回収というか、リサイクルのトラックなんか借りてやるような、そういうところがあって、車10台か20台ぐらい持ってやってる会社みたいなのがあって、そこに行ったら、後で返事するみたいな事があって、その間にトラックの話が決まっちゃったのかな。なんで、トラックにしたか、よく覚えとらん。

山岡:体力、かなりいるんじゃないですか？

西島:最初は体力問題よりも、何やるのかさっぱりわからなかった。免許はあったんですけど。普通免許の4トンまで乗れるというやつ。昔の免許はみんなそうだったです。

山岡:そもそも乗れたんですか。トラックに、乗ったことあったんですか。

西島:ちょっと、若い頃にちり紙交換やってたことがあるから、トラックは運転したことあるけど、そんなでかいトラックは運転した事がなかった。最初はもちろん大変だけど。

山岡:大変でしょう。

西島:トラックの運転もそうだし、荷物がとにかくまあ…すごいよ、運転そのものよりも。運転はだんだん慣れるけど、荷物の重さっていうのかね、一番最初はね。そのトラック仕事は、12時間労働で、月33万円くれるっていうんで。で、そのトラックの会社から派遣されて、その派遣先がセブンイレブンの配達。配達って言うか、センターから冷凍食品を各店舗に1日に30軒以上あちこちに配るんだけど。それをまず、2ヶ月位やったかなあ。だけど、その時、まともに給料貰えなかった。なんでかって言うと、自分で全部やれないのね。その間に身体がガタガタになっちゃって。休みの日に、台所で料理しようとしたのかなあ、なんか立っと思ったらさ、突然体がガタガタガタって崩れていて。痛みというよりも、もう立てなくなっちゃって、これはいかんなどと思って。

山岡:怖いですね。

西島:そしたらその時、その社長から電話があったので、様子を話したら「3日ぐらい休んでください」って、言われた。その時は、クビかなと思ったんだけど、その後、僕にやれそうな仕事があるからって、連絡がきた。最初にやったコンビニの時は、2トンか3トン車ぐらいだったんだけど、次のはまたさらに大きくて4トン車、市バスぐらい。びっくりしたよね。全長10mぐらいあるんじゃないかな。

山岡:運転できるんですか？

西島:どうかなあと思ったけど。イオングループのカゴ車って、荷物をスーパーに届けるやつだけど、要するに空きのカゴ車の回収なんだ。荷物を乗ってないやつを、集める。沢山集まるとそれなりに重いよ。だけどそれを、2ヶ月か3ヶ月やっているうちに、身体はなんとか動くようになった。だけど、それでもかなり痛くて。

山岡:社長さんは、考えてくれたんですね。そういうものなのかもしれないですけど。

西島:若い社長なんだよね。その会社は、最初僕が入った時には、ボロボロの車ばかりだったんだ、危険なくらい。何回も交渉した。安全上に問題があるよ、死ぬかも知れないって。そして、今、会社に30台ぐらい車があるうち、今僕は一番新しい車、乗させて貰ってる(笑)。信用されたのかも知れんけど。僕は1番年寄りより1つ若いくらい。

山岡:西島さん、フレキシビリティがありますね。交渉もうまい。子供の時に苦勞してらっしゃるからかしら。

西島:僕自身は、あんまり苦勞したという感覚はないんだけどね。僕は小学生の時から、自分とこのうどん屋では働いてる。小学校4年生の時には、うちのうどん屋のメニューの全部を自分一人で出来た。王子とじうどんでもなんでも。注文を受けて、出前まで全部1人でやったのが、小学校6年生の時。だけどうちの仕事で働いてもお金にならるので、外に働きに行った。1番最初に行ったのが酒屋さん。小学校6年生だったと思う。酒屋さんで今と違って、箱が木製で、すごい重いんだ。ジュースでもお酒でも箱はみんな木で出来とる。実際は、そんな重いついていう記憶あんまりないんだけど、自転車で配達した。

山岡:6年生で、働いてたんですか。

西島:うん。学校終わってから酒屋に行って、晩ご飯は食べさせてもらって、それから働いて、100円貰ったな。1日は3時間ぐらいかな。そんなに沢山お金を家には入れれなかったけど、少しは入れた。自分の小遣い稼ぎと、少し。小学校、中学校、高校と、ずっと何かをやってた。でも苦勞っていう感じはしなかったね。

山岡:で、今60歳になって新しい職について、身体が痛いとか大変なこともあるけども、メンタル的にはどうなんですか。

西島:メンタル的には……。僕はね、花市場辞める時に、一生絵以外の仕事はしないので、辞めさせてもらいますっ言ってね、やめたのね(笑)。

山岡:それ何歳のときですか？

西島:子供が生まれる時だから、1983年。30歳。

山岡:それからずっと仕事してなかったんですか？

西島:少しはやったよ。赤ん坊の似顔絵とかさ、いい金額になって、1日2時間か3時間で1万5000円ぐらいくれたりとか。子供は動くもんだから、難しいところもあるどね、喜んでもらえる。コツとしては、その周りを描く。着てる服の柄とか、かぶってる帽子とかちょっとしたことを、描いてあげると、喜ばれる。

山岡:それは、画家の延長だから、辛くはなかった？

西島:でも、1番キツかったのは売り絵。結局、最終的にはまともにやってない、少しはやったけど。売り絵というのは、西洋の建物を描いたりとか、カトレアの花とか花を描いたりとか、美人画を描いたりとか。

山岡:デパートとかに並んでるやつですね。

西島:僕は器用なんで描けちゃうんだよね。1枚描くと、しかも、パステル画っていう領域だった、僕に頼まれたのは。カタログも作るって言って、パステル画のセットも全部向こうが用意して、でも僕の名前じゃなくて。何か年鑑に、嘘の値段で出すんですよ。まず、見本用を描く。1枚描いて5000円なんだけど。5000円だけ1時間もかからん、1枚描くの。

山岡:テーマも決まっていれば、別に苦労しない。

西島:サササッと描くだけで、そうすると10枚も描いたら相当になるんだけど、それでも僕、その見本のやつは描いたけど、結局あと1枚もやらなかった。いや、いやなんで、もう精神的にやってけない。

山岡:そういうのは精神にくるんですね。トラックとかは？

西島:トラックも微妙だけどね、微妙けども、僕は絵を描いているという、思い込みなのかな、どうか知らんけど(笑)。「労働について」は、ちょっと長ったらしいけど、《原記憶交感儀》という文章で書いたことがある。「原記憶」というのは僕が勝手に作った言葉なんだ。

山岡:なるほど。

西島:でね、近頃は、《原記憶交感儀、労働について》という題したパフォーマンスもあるんだけど、その「原記憶」という言葉は、ずっと前の経験から生まれた。犬山市の岩田洗心館というのがあって、古美術を集めている博物館なんだけど、そこが、僕らがやってたミニコミの「裸眼」の編集室にもなっていた。その「岩田洗心館」では毎月1回金曜日に、「裸眼壺金講座」っていうのを開いていた。それは、いわゆる講座ではなくて、誰かが呼んで話をしてもらったりして、何かをネタにして話をする、そういう場だったのね。その「裸眼壺金講座」の中で、僕が何かをやるという事になった。それが《子子彷徨変異》。

山岡:子(げつげつ)って読むんですか！これ。

西島:辞書でも出てくるよ普通に、ボウフラっていう。蚊の赤ちゃん、本当は子(ケチ)らしいけどね、ケチケチか、ケツケツか、なんだろうけど、子子(ゲツゲツ)という読み方もあるみたい。一般的にはその字を使うことは、ほぼない。「子」自体は小さいという意味でしょ、「子」は、それよりさらに小さいものという意味……。犬山の岩田洗心館では、案内状か何かのために、何かタイトルをつけなあかんような雰囲気があった。たまたま、近くの畑の所に水瓶みたいのがあって、ボウフラがいたんだよね。ボウフラが沢山上がったり下りたりする様子を見とって、思いついたんだ。

山岡:なるほど。そして、それはセッションだったんですよね。

西島:音楽の人はフリージャズかな、ジャズというのかな?ノイズじゃないけどね、そういう人が会場にいて、あともうひとり女のひとと二人で、僕が洗心館の上の方から、声を出しながらふんどし姿で降りてくる。女のひとと2人でつたって来て、場所の中に入る。暗幕が張ってあり、中に子どもの頃の記憶にあるような電球がたくさんと、新聞紙とさらしが敷いてあった。

山岡:はい。

西島:その時は何の言葉もなくやって。そこで、スイカを使って、僕の子どもの頃の記憶をたどるということをやったわけ。

山岡:それが「原記憶」ですか?

西島:「原記憶」というのは、そういうことではないの。その時は、子どもの時のように、スイカを切ってみんなに配って食べてもらってというのをやったのね。ただそれだけなんだけど、「現代生け花」の人たちがたくさん来てたから、なんとなく意識して。

山岡:はい。

西島:その時に、誰か、遠くの方で「原記憶」という言葉が出てきたのね。いや、そう聞こえたかどうかは覚えられないけど、とにかく「原記憶」というのは、その時に、できた言葉。そして、その時、ものすごく疲れたんだ。

山岡:はい。

西島:1週間ぐらい、心身ともに抜けきっちゃったって感じで。こういう座椅子に座ったまま、酒も飲んでないんだけど、とにかく1週間ぐらい、座ったまま。

山岡:は～。

西島:その時の行為は、1日やっただけ。1日やっただって言っても、朝から仕込みがあって、10ワットぐらいの電球をいくつも、ずーっと広いところで吊るしたりとか、その電線を這わしたりとか、かなり大がかりな暗幕も張ったりとか、そういう作業もあったけどね。暗幕の中、真っ暗な中でスイカを食べてもらいたかったので、真っ暗にした。他にもいろいろしたあるんだけど、とにかく、帰ってきて、ここで1週間ぐらいぼーっとしていた。その時、「原記憶」という言葉の続きが、いっぱい出てきたのね!ぼーっとして、全然だめだなと思っていたら、突然、言葉が出てきた。

山岡:へー!

西島:で、今はね、そういうのを待つとると感じ。もう無理かもしれない。

山岡:今？

西島:もう、無理かもしれん。

山岡:その時は、パーっと、言葉が湧いてきたんですか？

西島:メモすればよかった、きちっと。言葉というかね、それまでね、ぼんやりと考えていたのが、明晰に、ピピピピーっと整理されてくる(笑)。例えばアイデンティティということは、大抵は、こういうふうの世界があつて、またこっちの世界があつて、ここに自分がいて、2つの世界がどっか重なってるから、アイデンティティが成立するということだと、思うんだよね。別の言い方をすれば、全部、つまり、世界中が自分のアイデンティティに、なりうるわけがない。世界と自己同一化するわけじゃない。だけど、その時わかったのは、たった1つの事。そういう図形的ではない所に、1つのものがポーンとあるという感覚。琵琶湖の水が飛んでくみたいな感じ(笑)、感覚で言うと。

山岡:ほう。

西島:そして、そういう言葉を、書き留めたんだ。キーワードだけは書き留めた。でも、そのキーワードのメモがね、どっかへ行っちゃったんだけど、林くんが持ってたんだな。それで、コピーしたんだけど、また、どっかに…。でも、それ見てももうよく思い出せないかもしれない。だけど、そういうビョーンとした直感、絵で描かなきゃいけないみたいな、いわゆるインスピレーション。

山岡:はい。

西島:そういうのをね、僕は体験はしている。だから、今しんどいよ、トラックの仕事、なんでこんなことやるとするのか、自分でもよう分からんし、早よ家帰ってビール飲みたいぐらいしか考えてない(笑)。こないだの仕事は、辛かったなあ〜、本当に。3〜4ヶ月くらいやった。もうできんから、仕事を変えてくれって言おうかなと思ったら、ちょうど終わった。アマゾンのセンターから、違うセンターに持っていく仕事なんだけど、信じられないぐらいの量なんだわ。10パレットというてもぴんと来ないかもしれんけど。身体中ガタガタになる。これはもう、歳も歳でダメだなと思った。

山岡:インスピレーションが降ってくるのを待ちながら、トラックの仕事をしてるって言うことですか？

西島:いや、そこを考えるとつらダメなんだ。待つと、ダメです。まず待つという事は、なんかいつも考えてるということ。来るとしたら、ある時突然来るとしか、しょうがないっていうか。来ないかもしれない。このまま、死ぬかもしれない。もう若い時みたいに、そんなにピョンピョン来ないかもしれない。若いときは幻覚

とか幻想とかを観ることがあった。たとえば、16歳ぐらいのときは、6畳ぐらいの2階の木造のこのモルタルのところに住んでたけど、夜中に向こうから何か、何て言うのかな、労働歌みたいな感じでね。男の人の低い声の集団が、腹の底から、ウオウオウオウオウ～オウオー~~~~！！ってさ、行進して、近寄ってくるの！うわーっと感動しちゃってさ。

山岡: 本当に行進してたんですか？

西島: うん、音もすごくて、実際、歩いてると思うから、もう嬉しくなっちゃって、僕も参加しようと思って、窓をがらっと開けたら、スパッと消えた。

山岡: 幻聴？

西島: 幻聴だね。だけどあれはもう、本当感動しちゃってね、今でも思い出す、その感動。そういうのって、若い時はいくつもある。お化けとか、UFOも見たことある。だからそういう感覚というのは多分、自分の中では、他の人よりはあるのかなあと思う。というか、でもまあ年くってからはないかもしれないなあ。

山岡: 確かになんかちょっとわかります、西島さんは、不思議なところっていうか、ミステリアスなところがありますね。

西島: 「原記憶」というのは、10歳ぐらいの時でもあるかな。小学校の時にお腹壊して、寝てて、それでいつもその当時よく見る気持ち悪い嫌な夢があった。そして、その夢を見るとき、前兆がはっきりしてた。その前兆っていうのは、目をつぶる、すると何かギザギザみたいのが出てくるのね。それは、とんがったみたいなギザギザで、出てきて、それでカーンっとなって…。ただ、そのような精神状態、お腹が痛くて寝ていたり、その後見る夢というのがね、ものすごい恐ろしいよね。僕がちょっとした失敗をしたのね、夢の中で、そしたらね、世界がなくなっちゃった。僕のせいで。

山岡: また、極端に、恐ろしいですね。

西島: 恐ろしいよ！僕の責任でもあるし。世界全部がなくなっちゃうんだよね。それでそのなくなり方がね、どれだけ怖いかというと、物がなくなる以前の怖さなの。つまり、今僕は、言葉で説明できるけど、「絶対無」ってやつなんだ。「絶対無」というのは、あるとか、ない、も無い。だから、怖いのはね、僕、起きてからね、目の前にカーテンとかみんなあるわけよ。でもこれないと一緒の事なんだという。あるという事概念がなくなっちゃった。あるっていう事がないという事は、ものすごい。目で見えて、その前にこれがあるのに、これはないと一緒の事なんだよという。

山岡: あるのにないと一緒の事？…………それは怖いことかも知れない。

西島: その世界というか地球がなくなったとか、そういうレベルじゃなくて。

山岡: そ、それは、考えたことがあります！怖い。うわ ……………

西島: 宇宙もないという。それって、人類が滅びるとのことじゃない。

山岡: (なぜか、しくしく、泣き出す)

西島: あんまりにも、それ、良くないんで、そっから逃れる為に、何かある事にしよう、というふうに分かっていたの。絶対何かあるぞって。そこに記憶っていうのが、空間であろうと、世界であろうと、宇宙であろうと、全部が例えはないっていう事じゃなくて、何かある。その何かあるのは、一体な何か？という、物質じゃなくて、記憶というか、その精神だけがある。

山岡: あっ、あー。(やられてる)

西島: それは確実にあるんだと思ひ込みたいからで、本当に思ってるわけじゃないよ。100パーセント思ってるわけじゃないけど。

山岡: はい……

西島: 2回ぐらいあるんだよね、ここで。幻覚のような経験。ちょうど今のこの場所だね。1回は、林くんがここにいて、僕はこっちにいた。玄関の所に林くんが来たときに、ここ、雑草があったのね、どうでもいいんだけど。実際には、僕の女房が瀬戸で買ってきたという、知恵遅れの子供たちが作った、小さい花瓶があったの。その花瓶に雑草を1つ生けていた。それから、おいしいお煎茶を2人で飲もうと言って、僕は煎茶を丁寧に、淹れたんだ。抹茶ではなかったけど。

山岡: はい。

西島: その時、「侘び寂び」について話したんだよね。表面的な事だけど。だけどね、2人でそのお茶を飲んだ時に ……僕はマリファナやった事ないよ…… でもいわゆる「覚醒作用」というかさ、そのお茶を1杯飲んだ瞬間に、スコーン！とスコーン！と世界が広がった。(声がハイになっている)

山岡: へ～。

西島: それがふたりの間に、シューって言って、それが永遠にスポンスポン！と抜けてくみたいな感じ。その時に、「原記憶」って、あるかもしれないなあと思った。もしくはそれに近いのがね。

山岡:ほう。

西島:もう1回は、ここで、洗いもんがいっぱいあって、茶碗をたくさん、手で洗ってる最中に、ふっとそれに近いものを感じたわけだ。ほんのちょっとした時に。実際に「原記憶」の経験に、本当に近いのは、その2回ぐらい。

山岡:その「原記憶」っていうのは、ぱあっと開けるんですか？

西島:だから存在を超えたような感覚。

山岡:というのは、多幸福感があるんですか？

西島:そうです、多幸福感。

山岡:ふーむ。

西島:(笑)その時に、よく分かったのは、「茶の湯」だとか言うけれど、何か遊びであったりもするんだろうけど、お茶は、きっかけになるのかも。いや、でも何でも多分いいんだと思うんだよ。多分ね。

山岡:きっかけになるってことですか。

西島:さっき話した《浅井ますお追悼儀式》の時に、茶碗に1杯の飯を丁寧に盛って、丁寧に食べるというのをしたんだけど、それと、似たようなことと思うんだけどね。だけど、茶道が、今、形骸化したとしても、いまだに、残ってるという事は、それなりにやっぱり、あるんだと思う。つまり、同じ事を感じた人がいるんじゃないかな。

山岡:なるほど。

西島:たった1杯のこの粗茶は、1杯の粗茶でこんな贅沢な体験が出来るんだからさ。そう言ったらおかしいけど。「原記憶」というのは、そのようなこと。他にもあるけれど。

山岡:「原記憶」っていうのは……自分だけの記憶ではない。記憶って普通は自分だけの記憶だけど、記憶そのものが集団無意識みたいな記憶？

西島:それとはまたちょっと違うような感じがするんだよね。それかなあ、というふうに思ったりもするんだけど、だけどそれだと人間でしょう？ 集団無意識の集団という人間だもん。人間ではない、感じかな。

山岡:……でも記憶なんですね。人間のいない世界の記憶？

西島:うん、記憶。なので、やっぱり人間かな(笑)。言葉が全然見当たらないけど、ただ一番はその何ていうか、何もないというのが怖い。怖いというか、それに対して何かあると思いたいわけ。

山岡:う～ん。

西島:死ぬことよりそっちの方の、その怖さの恐怖感というのは、僕の中では、強くある。今だってそうやって、話しとって……以前だともっと怖かったんだけど、今は怖くない。今さっきちょっと怖かったでしょう？この話ってね、すごく怖がる人いるんだよ。

山岡:考えたことがあるからですよ。

西島:怖いって言うのは心理的な感覚だけだね。でもこじつけかもしれないけど、これからこのまま死んじゃうかも知れんし、僕はね、書き留めようとは思ってるんだよね、何か文字化しようと、一番最初からそう思ってた。もう題名だけは決まってる。

山岡:何ですか。

西島:『痛み回る』っていう。カッコして、「ユイマールではないけれど」っていう。『痛み回る』というのは、実際に痛いんだ。この痛みが、今日はここが痛くて、あれ、こっちの痛みが取れたと思ったら、今度こっちが痛い、痛くない時がない。

山岡:ふーむ。

西島:そっから、そういうそれは実際に痛い事を表現しようとしてるわけじゃないんだけど(笑)なんかよく分からんけど、書ききっかけになったという、タイトルだけが決まってる。それは、労働と貨幣についてというのが一番あるかもしれないけど、貨幣経済について。

瀬藤:痛いっていうのは、労働に紐づいた感覚ですか？

西島:そうそう、そこからだと書きやすいという。

6.「NIPAF」との関わり、海外での発表

山岡:ところで、「日本国際パフォーマンスアートフェスティバル(Nippon International Performance Art Festival、通称NIPAFまたはニパフ)」には、何回参加されましたか？

西島:結局10年間……やったんじゃないかなあ。

山岡:10年も！お疲れ様でした。しかも、NIPAFの名古屋支部をやっていたんですね。

西島:名古屋支部という発想はなかったんだけど、でも結局はそうかな。名古屋でやる時にね、年に2回でしょ、なおかつ、イベントがあるから、年何回になるか、わからんけど？

山岡:何年から、何年までやったんですか？

西島:1998年から2007年までかな。

山岡:その間、海外にもだいぶ行かれましたよね？

西島:9割がたが、霜田さんに誘われてって感じだよな。

山岡:ミャンマーとか、インドネシア、どうでしたか？海外での経験は。

西島:一言でぱつとは言えんけど。一番最初に行ったのが……フランスとマカオと香港かな？

山岡:1998年ですね。ジャン・フランソワ・メイヤーギャラリー？

西島:霜田さんの企画で行って、向こうで「日本人を見せる」みたいな感じかな？

瀬藤:「日本人を見せる」(笑)って、博覧会みたいですね。

西島:日本の大使館だった。凱旋門の真ん前ぐらいの……………あんまり覚えてないなあ。

山岡:やっぱり1日に何人かが続けてやるというプログラムのうちの1つですか。室内でやったんですか？《音採集及び声帯体現行為》って書いてあるから、もしかしたら外かなと思ったけど…マルセイユの場合。

西島:ああ、それね、短いやつ。音採集なのに、ギャラリー内だった。作品を展示して、何の作品を展示したのか覚えがないけど、何かその辺で適当に作ったのかな。短い、本当に短くて、救急車が来た。救急車は、僕のに来たんじゃないよ。通った。救急車の音とか採集した、という意味。

山岡: 日本大使館文化センターでの作品は、タイトルは《アヒンサ》ですね。フランス国内の、あちこち回ったんですね。マルセイユ、ヴェンタブラン、パリ、エクサンプロヴァンス。

西島: そんなときはね、鉄球は持って行ってない。僕の友達で、舞台の美術をする人がいて、廃材として出た暗幕をくれたことがあってね。それが大量にあったので、それを持っていった。その暗幕を最初に使ったのは、1995年の名古屋の留学生宿舎の屋上でのイベント。その時の行為をその後、あちこちでやっただけで感じかな。暗幕はとにかく大きいんだよ10×20mぐらいで、それが3枚ぐらいあった。それでやる行為はものすごく単純な行為。2時間ぐらいかな。黒いゴミ袋も使う。黒いゴミ袋を中で膨らませると、空気の入ったゴミ袋ができるよね、それを何10枚も、何か膨らませる。僕は、暗幕の下に潜っていて、そこで袋を膨らませている。外から見ると、人間が最初1人入っただけなのに、だんだんだんだんだんそれが大きくなっていくという、何かそれだけのやつなんだけど。名古屋の時は、1人横で太鼓を叩いてくれる人がいた。その人もおかげで、だいぶ場がもったかもしれないけど。フランスでは、音はなし。録音を持っていったかもしれない、覚えてない。

山岡: 太鼓叩いたのはどんな人ですか？

西島: 山田武司って言って、よく彼とは何回もやった事あるけど。

山岡: 太鼓と合わすっていうことは、よくあるんですか？

西島: 合わせてるわけではなくて、勝手にやってる感じです。よくダンスなんかで、音楽に合わせて動くやつあるでしょ？僕は、それは、すごい受け付けられない。

山岡: はい、私も。だから聞きました。

西島:ズレてるって言ったらおかしいけど、関係なくやる。ダンスでもさあ、ああいう風にやらんでもいいのになあと思うんだけど。

山岡: 抵抗ある人もない人もいる。

西島: 僕は、ものすごく気になってさ。しかも、元々楽曲でリズムとかちゃんとしてるのを、やってるならまだわからんでもないんだよね、そうじゃなくて、フリーの演奏の場合、それは、ちょっと違うかなって(笑)。好きずきの話だけどね。

山岡: それで、海外では、どんなふうなリアクションでしたか？

西島: ジャポニズムというか、フランスだったら特に、そんな反応。僕、文字書くでしょう。文字は人気あつ

たね。ふんどしとかもね(笑)。文字を、書いて下さいって人、いっぱいいた。

山岡:アジアではどうですか? マカオとか、インドネシアとかタイとか行ってますよね。

西島:うん……………どうなったかと言うとあれだけど、マカオは2回ぐらい行ってるかな。大体の海外体験というのは15カ国ぐらいで20回ぐらい行ってるかなって感じ。

瀬藤:沢山行ってるけどあんまり、強い印象はなさそうですね。

山岡:そうみたいね。

西島:海外はニューヨークに2ヶ月ぐらい滞在したことある、個展で。だけど…………。

山岡:印象薄そうですね。不思議だな。

瀬藤:まるで、行ってないみたい。

西島:個展で、お客さんは、来る事は来るけど、そんなに来ない。ギャラリーなんだけど、分厚い鉄板が敷いてあるんだよね。その上にダンボール敷いて、そこに寝袋で、寝泊まりしながらずっと絵を描き続けていくっていうのをした。2ヶ月ぐらい、1ヶ月半ぐらいだったかな。

山岡:サラッというけど、なかなか大変そうですね。

西島:その頃、僕、たばこ吸ってたからさ。たばこを吸うのが、ギャラリーの中は駄目なんだよね。でも、外は危険だから出るなどとも言われてた。場所は、ブルックリンで、近くにドラッグの病院もあった。ちょっと余分な話だけだよ。

山岡:いやいや、海外に興味なさそうなのが面白い。

瀬藤:ところで、NIPAFとは、どんな経緯で始まって、どう終わったんですか?

西島:始まった方から言うと、僕は一番最初、パフォーマンスというか、行為とかを、本格的にやろうと思った時に、パフォーマンスとして、他の人が何をやってるかみたいなの、興味が生じてきたわけよ。要するに自分はやってるけど、自分だけじゃなくて、他の人のことを知りたかった。僕は「ゼロ次元」には、直接関係ないしね。「ゼロ次元」は、なんとなくそんなにピンときてなかったんだ。

山岡:なるほど～。

西島:もちろん岩田さんは知ってるし、岩田さんそこにはよく行ったよ、20歳ぐらいの時に。その時は「ゼロ次元」の事は全然、彼も話をせんかった。そして、NIPAFより前に、荒井真一くんに会うことがあった。僕はミニコミを出してたから、荒井くんにも原稿書いてもらった。

山岡:ほう。

西島:だから、最初の情報としては荒井くんなの。それから、僕はあんまり東京なんか行かなかったから、名古屋で知り合いの三頭谷鷹史さんが東京行った時に、いろんなミニコミを持って帰ってきたんだわ。ギャラリーとかに置いてあるやつ、その中に荒井くんの「仁王立ち倶楽部」もあった。それから、東京の、ルナミ画廊の人が、こんな人もいますけどと言って、霜田さんの何か、小冊子かなんか、新聞みたいなやつを送って来たんだよね。

山岡:「霜田誠二新聞」でしょう。

西島:そう。それを読んで、興味を持った。なんかビデオか何か売ってますみたいなこと書いてあったのかな。それで、だいが買ったよ、僕。そして、彼に連絡した。別に彼と何か一緒にやろうと思ってなかったけど、とにかく、他の人たちに興味を持つようになってた。さっきの、大阪の「散歩派」とか「黄色原人」だとか。

山岡:霜田さんに限らず、いろいろな名古屋以外の人に興味が出てきた頃だったんですね。

西島:「ゼロ次元」に対しての見方も少し変わってきたかなあ。加藤好弘とも近くなった、近くなったというか、会うようになった。浅井ますおの本を長いこと借りてたんよ。浅井ますおのミニコミの「ゲゲ」も、かなり沢山送ってきてくれたのね。古いのは、ガリ版刷り。「ゼロ次元」も、僕はマイナーだからという感覚、マイナーだから僕は興味がある。メジャーなものにはあんまり興味がなくて、元々。マイナー志向というか(笑)もう有名になったら、おしまいっていうのが僕は昔からもう、僕らの年代はそういうのがある。

山岡:なんだか、わかります。

西島:テレビに出たらもうこのミュージシャンおしまいとかさ。なんかそういうのが僕らの時まではあったけど、その後は知らんよ。どんどんどんどん有名な人になっていく時代もあるんだから。ただ、それまでは、なんか、テレビに出たらもう、テレビなんか絶対出たらあかんみたいな。そのぐらいの何か、みんなにあったんじゃない?ミュージシャンたちにも、当時はね。僕だけが言ってるだけじゃなくて、現実にはそれは。「マイナー志向」と言ったらいいけど、そのアングラじゃないと本物じゃないみたいな。

山岡:なるほど!

西島:何かそういう、商業主義というのに対してのすごいアンチの気持ちというか、今でもそういう人もいるだろうし、どの時代でもいるだろうけど、それよりも、そういうのが僕らの、僕らが若い時の連中は共感を得たというか、信用出来たというか、そういう、そういう感じがしたんだよね。

山岡:なるほどね。

西島:でね、霜田さんというのは、あちこちに声を掛けている人で、名古屋でも1回か2回か、パフォーマンスをやったんだよね、個人的に。例のEDラボでもやったんだ。

山岡:おーおー。

西島:EDラボでやつ時に、僕は観に行っただけ。近くだから。今は履いてないけど、当時、僕は下駄だったからさ、それで、目立ったのか知らんけど話しかけてきてさ。ちなみ、僕はパンツも履いてなかった。ちょっと余分な話(笑)かな。今は、履いてるよ、当時、こだわりがあったんだよ。

山岡:こだわり！(笑)

西島:……なんだっけ。あ、その後、霜田さんは、1、2回名古屋に来て、これからNIPAFというのを始めるとかなんとか、言ってた。その前にね、人間なんとかって言うイベントがあったと思う。

山岡:「人間潮流」。日韓交流展でした。長野市と釜山でありました。1994年です。わたし、出演しましたよ。

西島:それだね、僕が韓国の人達を、名古屋の空港と名古屋駅の、送り迎えするように、頼まれたんよ。その次から、霜田さんの方から出てくださってというふうな誘いがあった。ギャラが1ヶ所、1万円。

山岡:ギャラもらったんですか？ 私も「人間潮流」では、もらいました。

西島:2回ぐらい。次の時もくれたのかな。1998年からは、僕は名古屋公演の企画者になって、その前の年はただ参加しただけだと思う。で、98年の春のNIPAFを名古屋芸大でやったんだけど、それがめちゃくちゃ大変だったの。すごく大変だった(笑)。というのは全部、初めてのことで。だけど300人ぐらいお客さん来たかな。

山岡:おおお。

西島:名古屋芸大、その時友だちの何人か名古屋芸大は働いていたからさ、会場とか、洋画棟の古いやつとか使えたんだよ。それで、寝泊まりはどっかホテルなんかを取ったかな？とにかく、やめるに至った

原因は、もうその最初の時にすでにあったかもしれん。ボランティアスタッフが相当たくさんおっただよね。最後のその打ち上げもみんな、この家で飯作って持ってったりとか、いろいろみんな動いてくれてやってくれたんだよね。だけど、慣れてないもんで、全く何もない場所に観客席作るのは、本当に大変だった。木製のパレット、重いやつ、あれを使った。今のパレットはプラスチックで軽いけど、あれが名古屋芸大の駐車場みたいところに山のように捨ててあったんだわ、それを客席に使ったのがもう間違いというか(笑)。作ったのはいいんだけど、片付けるものすごい時間がかかって。そいで深夜になっちゃったのね。ボランティアスタッフがヘトヘトになって打ち上げのパーティ会場に戻ったら、何も食べるものなくて。

山岡:う〜ん。

西島:それと、誰だったかアーティストが、なんか、立小便してさ、会場で。それも大変だった。で、まあ、とにかく、僕のうちでも、何も食べるもん何もなくてさ、僕は急遽、コンビニ行っているもの買って来て、ボランティアスタッフ達の食べ物を、なんとかした。ということで、その後のことも、ちょっとなんとなく、予感があった……。そんなことで10年後、NIPAFを僕はやめた。NIPAF自体は僕は重要な活動だとは思ってたよ。

瀬藤:でも、10年はやったんですね。重要なのは、わかります。

西島:やめた理由の一つに助成金に対しての考え方があるけれど、僕が一番気になったのは、ボランティアに対する考え方。要するにアーティストがいて、それを支えるのがボランティアだという考え方は、僕には一切なかったからね。

山岡:はい。

西島:僕は「アエッタ」という思想、考え方だから、その場にいる人はみんな同等だと思うんですよ。

山岡:ええ、ええ。

西島:「アエッタ」の場はどっちが上とか下はないの。NIPAFの場合は、アーティストがいなければ何も成立しないんじゃないかという発想で、あとの人たちは、結局それを支える立場という。そういう発想は僕は一切ないので、極端な話、ボランティアだけでもいいくらいの感じ。僕は人が集まると言う事は、そういうことだと思ってて、アーティストはいてもいなくても極端な話(笑)。

山岡:う〜む、さすがです。その後は、参加もされてないんですか？

西島:してない。

7. 《非殺生沈思瞑想行為》「行為∞思考」《音採集行為》《六四追悼儀》

山岡:「非殺生(アヒンサ)」など、西島さん自身のコンセプトってあるじゃないですか。作品のタイトルにもなっていますね。それらをいくつかお話していただけたらと思います。これまでに、すでに色々お聞きはしていますが。

西島:アヒンサの元はね、最初の方で話した「日本アジア思想研究会」の時に、インドのマハトマ・ガンジーの自叙伝を読書会で取り上げてたのね。僕はその中で、「非殺生」というか、「非暴力主義」のもとになる「アヒンサ」という言葉が、しっくりきた。最初は、意味があんまりよくわからなかった。もちろん「非暴力」もそうだけど、最後は潰されていく、それなのに、なぜ力になるかっていうのが。無抵抗主義ではなくて、「アヒンサ」。それがね、何でかというのが、ある時、ふっと解けた。

山岡:ほう、ほう。

西島:事物もそうかもしれんけど、生き物だけの関係でだけ言っても、たとえば、昨日も仕事の最後に片付けようと思ったら、トラックの後ろの荷台のところに、小さい蛾が一羽居るんだよね。なんとなく…… 殺せない。なんでか知らんけど。蚊でも一緒だよ。殺すと気になりやせんかな。何で気になるかというのと、相手は殺されないと思ってるのがわかるから。信じ抜いてる力っていうかな。絶対、この人には殺せないと。信じ抜いてる力、というのかな。それが伝わってくる。

山岡:それがわかるんですね。

西島:信じ抜く力を「アヒンサ」というんだと。人をどこまでも信じ抜く。ちょっと話ずれるかもしれないけど、高校の時に友達と剣の達人というのは何かということと話したのね。有名な話なのかどうか知らないけど、剣の達人というのは……端折ると…最初はとにかく刀で戦って強いということ。それが一番最初の剣の達人ですよ。その上の剣の達人というのは「白羽取り」。剣が来たのをフィッと止めるやつ。そのもうひとつ上が、刀を合わせる事なく避けるだけで、いつまで経っても切られない。スッと避けるだけで、絶対切れない。その上のね、一番最後の剣の達人というのは、切られて死んでいくやつを言う。

山岡:切られて殺されるのも厭わない人が最高の達人。

西島:なんとなく僕ちょっとね、変な話だけど、なんとなくわかるんだな。

山岡:すごい……………

西島:それは「アヒンサ」と関連あるのか、どうかわからんけど。殺すというのは、ものすごくなんていう

か、苦しい。苦しいんだよね、殺す側は多分。その苦しいのは、相手がこっちを信用してくれてるから、まさか殺さないだろうと。たぶんそれが「アヒンサ」だと思う。ただ殺さない事に美德があるんじゃないって、心の問題だと思うんだよね、信じ抜く気持ち。

山岡:それがその作品に反映してるって事ですか？

西島:反映してるかどうか分かんけど、鉄球に「アヒンサ」と名付けている。

山岡:そっか！鉄球の名前なんだ。

西島:「アヒンサ」って言う作品、絵は描いた事があるよ、たくさん。タイトルを聞かれた時に、言ったか、どうかわからんけど。

山岡:西島さんは、「パフォーマンス」ではなく、「行為」または「体現」という言葉を使いますね。

西島:「パフォーマンス」という言葉よりも、「行為」って言葉の方が先に入ってきたというか。それとまず、「パフォーマンス」というとやっぱりかっこいいなと思う。耳から言うよね。世間では、意味がちよつとずれとるけどね。あの人は絵に描いた餅みたいな、な感じで、あれは「パフォーマンス」だよって言い方ってあったでしょ、一時。

山岡:ええ、ええ。中身がなくて、ポーズだけ、みたいな意味。

西島:それとは違って、美術の中の文脈で言う「パフォーマンス」っていうとカッコいい、コンセプチュアルアートというか。「パフォーマンス」というのは大雑把に言うと、観念アートの中で、「インスタレーション」と「パフォーマンス」があるよね。行為をした痕跡が「インスタレーション」で、行為自体が「パフォーマンス」。僕は若い人に話す時、生け花に例える。花を刺す。それが「行為」。で、「パフォーマンス」が、なんでもかっこいいかという、ヨーゼフ・ボイスとかさ、それからローリ・アンダーソンとかさ、そういうイメージ。な「ユリイカ」で、パフォーマンス特集があったのね。あれは何年？80年代入ってからかな。

山岡:1984年のようです。

西島:「パフォーマンス」とはこういうもんだ、と書いてある。どっちかっていうと日本とはあまり関係なくて、アメリカというか、ヨーロッパの文化という気がする。観念アートの一部。そういうことに、なんていうのかな、ちよつと違うなというのが、感覚的に、一番最初からあった。かっこいいっていうのは、何ていうのかな、えーと、スマートというかな。実際に、ボイスとかローリ・アンダーソンの「パフォーマンス」を見たことがあるわけじゃないんだけど。

山岡:西島さんは、「行為」をする時に、構成を先に決めてるんですか？それとももっと即興的なものが入る？

西島:2通りある。どっちもある。僕がステージでやる時とか、人前でやる時とか、あれはもう全部細かく決まったことをやるだけ。誰でもできる。鉄球とか電球の扱い方とか云々言ったらきりがないけど、やることは誰でもできること。やることはシナリオで書いたら、そのままできる。

山岡:シナリオに書いたことありますか？

西島:ない。ないけど、何回も観てる人はいくらでもいるから。林くんが、一通り全部頭からしっぽまでシナリオみたいに書いてくれたことがある。

山岡:そうですね。それ見てみたい。たぶん、できるんだろうなっていうのはわかる。移動するスピードとか、その場の空気が変わってる部分はあるかも。特に屋外の場合などはあると思います。

西島:感覚的なものは、あるかもしれない。ベルクソンの一節だけ頭に残っとることがあって、今ある普通の風景を、いつもの見慣れた風景を、今初めて見るように見る、ということ。

山岡:はい。

西島:今、は、突然ここに現れた。今、ずっと流れの中で見てるでしょ。これを切り取って、今、突然これが現れたように、見るっていう。そういう見方っていうか、それがなんでベルクソンなのかわからんけど。ベルクソンがそんなようなことを言ってたと思う。見慣れた光景を、今初めて切り取って見えるような見方っていうか。

山岡:それはどうやったら、できるんですか？

西島:それね、気持ちでできる。気持ちとね、それから生活の中でそういうことたまにある。長女が保育園の時に送っていくとき、肩車して靴を履こうとしたの、そしたらそこで、玄関の所で、背骨をバキーンってやって、動けなくなっちゃったの。完全に動けなくなっちゃってさ。で救急車呼んで。10日間くらい入院したことあるんだけど。……いま、何の話しとったかな。

山岡:初めて見た風景。

西島:あーそうそう。そっから、10日間入院して、で、帰って来た時に、自分の部屋に入ったんだわ。そう

したら、ものすごく、こんな汚い部屋が、美しく見えたの。これは旅に行った人はそうなのかもしれないけど、長いこと空けてたからかもしれないけど。その時にね、見え方って言うのは、実際の大きさより小さく見える。小さく見える感覚。

山岡:ほう!

西島:凝縮というのはちょっと違う。なんかね、ちょっとね、仔細がヒュヒュヒューっと、細かく全部同時に見えて、シュッとこう固まる。ああ、これが初めて見る感覚だなと思った。ようするに客観的というのは、ちょっと違うんだけど。いつも自分が住んでたりすると、都合のいい部分しか見てないでしょ。

山岡:うーん!

西島:だけど、長いこと空けてると、今まで見てなかったところも、パンパンパンパンパーンパンパンパンパンなるほどなるほどなるほどって感じで見えて(笑)。なお、かつ、それが凝縮してシュシュシューと一つの塊になるっていう。あーこういうのかなっていうのは、思うね。

山岡:面白いですね……。

西島:で、そういうのは大事にしてるといふか。歌うときもそうだけど。

山岡:え! 歌うんですか?

西島:普通の歌。「夕暮れに～仰ぎ見る～」♪色んな歌、歌うよ。

山岡:個人的に歌うやつですね。

西島:でね、歌ときに、それもけっこう大事にしてるといふか。

山岡:誰も聞いてないとき、ですよ。

西島:それ意識的にやればできる。今、ここに初めて歌う歌っていう。何回も歌った歌でも、今ここで初めて発声するといふか……

山岡:一期一会? 素敵です。

西島:ちょっと違うかもしれんけど、鷹赤児さんが名古屋来た時、岩田信市から頼まれて、手伝ってくれ

って言われたんだよね。「アリアドーネの会」っていうのがあって、麿さんは、それを演出しとった。で、僕は手伝いに行ったらいいのかと思ったけど、何もやることないんだよね。麿さんの横にいるだけ。麿さんも、何にも言わないんだ。で、彼はよく歌を歌ってたね。その歌が面白いのは、普通の歌なんだよ、唱歌とか、その辺の演歌とか。だけどそれがね、例えばさっきの「夕暮れに～仰ぎ見る～♪」の歌でいえば、「ゆう…」だけ言って、しばらく、ここで止まるわけだよ。長いこと経ってから、「…暮れに～♪……」っていう。

山岡: え？

西島: そういう歌をずっと歌ってるわけ。意図的にやってるのか、単に口ずさんでるのか知らなんけど。

山岡: 麿さんが？

西島: うん。岩田信市が、何か意図的に、僕に伝えたかったことがあったかもしれないと思うんだけど、僕そのことしか覚えてない。何にも手伝った記憶ない、ただ横に座っただけ。邪魔だったかもしれんけど(笑)。

山岡: へ～

西島: でも、その歌の歌い方っていうのは、いまだにやるよ僕、自分で。面白いもん。いっぺん、途切らせて、間を意図的に作って、また歌う。

山岡: ふ～む。

西島: すごい面白いので、やってみたらいい。

山岡: やってみます。

西島: (笑) 井上陽水って人がいますよね、彼は、それができる人だった。

山岡: かも！！ わかる。

西島: どうってことない歌でも、今初めてこの人はここで歌うんだっていう感じの歌い方をする。

山岡: (笑) なるほど、なんか、わかります(笑)。今日はとりあえず「パフォーマンス」と呼びますけど、西島さんの「行為」のときも、それを意識しているんですか？

….

西島:意図的にね。さっきの鉄球の上に立つときにみたいに。例えば、「ひとつ……」ってやるでしょ。「ふた一つ…」の時に、「ひとつ、ふたつ、みっつ、よっつ」ってただ続けてやるんじゃないで。しかも意図的にずらすじゃなくて、「ひとつ…ふた一つ、……みつ、……..よっ一つ」っていう……

山岡:ああ、わかった…!

西島:…… そういうどうでもいいようなことに、こだわる(笑)。ガーンとやらずに。わざとじゃないよ、テクニックじゃないよ。

山岡:面白い、面白い、わかりました。単にもったいぶるんじゃないで、ある意味すこし楽しむ感覚。ところで、アエッタの仲間である林さん、けっこう若い時過激だったけども、最近はどうなんでしょう?

西島:今でもかなり危ない。やってないやってないって言って、けっこうやってるんですよ。

山岡:えっ!

西島:けっこうやってる。2013年に、彼の企画で、一宮の織部亭での「行為∞思考」という企画があった。彼は、『行為∞思考』って本も作った。もともとは、僕が本を作る予定だったんだ。本作るっていうのは、名古屋のギャラリーフィナルテってところで、2週間自由に使っていいってことになり、その時、2週間毎日日替わりで1人ずつに行為をしてもらうのを考えた。その記録の本。

山岡:いつ頃のことですか?

西島:1997年だと思う。その時、僕の「行為」ではなく、他の人の「行為」の記録を撮り、さらに文章化するという企画で、14人に呼びかけた。その時に福原くん、古橋くん、浜島さん、林くん。考えてみるとその時の壮々たるメンバー全部に声をかけたんだよ、僕の知る限り。岡崎さんとか、ノイズの人もね。で、2週間ギャラリーに寝泊まりした。24時間どの時間にやってもいいという、24時間やり続けてもいいっていう呼びかけで。ただ終わった後に必ずトークの時間を持つというのは決めていた。それもみんな記録する。で、いずれそれを本にして出すっていう企画だったんだけど(笑)、結局本を出さなかった。その時、海上宏美さんって人、現代演劇の評論家なんだけど、その人にも2週間付き合ってもらった。何か書いてくださいってこと前もって言ってあった。で、文章を書いてもらったの。林くんには2週間毎日付き合っ、全員の写真を撮ってくれた。僕はビデオを撮った。僕は、そのまま放置してある。林くんが本出しましよよと。結局、彼がこの部屋に来て、2人で話したのと、それから前に海上さんの文章を書いてくれていたもの、そして林くんの写真、そういう本を彼が発行してくれた。それ今日、持ってくればよかったね。

山岡: 見せてくださいよ。

西島: で、その2013年のイベントの時、林くんは今でも体を痛めつけるアクションを普通にやった。自虐的行為っていうかさ。コンクリートの上に七転八倒して体を傷めつけたり。でも、痛めつけること自体が目的ではないの。ようするに自分自身に対する問いかけで、お前はこれでいいのかみたいな感じ。単純にすごく真面目な人。それで僕は抜群に才能があると思う。レリーフの作品なんかものすごくよかった。みんな捨てちゃったけど。巨大なやつだよ。小さい木片をさ、いっぱいのものでくっつけて。既成のカシュー漆だけ。漆を塗って、蜂の巣みたいなのを、だんだん増殖型で作っていきんだけど。装飾的とかそういうのとは違って、本当にすごい作品だった。

山岡: でも、捨てちゃったんでうね。

西島: そう。その辺がよくわからん。それから、あまり人に言うことがなかったけど、僕も、長いこと時間をかける作品というのを何度か作ったことがある。滞在型っていうのはさっき話したアメリカの個展はそうだけど、行為型としては前橋で2ヶ月くらいやったんよ、2001年に。前橋の古い消防署に寝泊まりした。本当はね、そこはドイツ人が3人と日本人が3人のアーティストが滞在して、現地制作するという、そういう展覧会だったの。僕は最初からそこで寝泊まりして、そこを拠点にして前橋の周辺の現場を何か所か決めた。それらの所に1週間ずつ移動しながら、「行為」をした。でもさ、寝泊まりしたのは、実際は僕1人でさ。ものすごい怖かったんだ。誰もおらん古い消防署でさ。

山岡: えええ。

西島: まあ、そういうのは余裕があつて面白い。そういうのを、「環境アート」っていうのか、よく、わからんけど。ここから犬山まで17キロくらいあるんだけど、鉄球持って歩いたりとか、川の中歩いたりとか、いろいろあるんだよね。そういう時と同じように、前橋でも、全然知らない人がけっこう差し入れ持ってきてくれるのよ。

山岡: へ～。

西島: そういう展開があるのが面白い。別に期待してるわけじゃないよ。毎日、日の出から日没まで何やってるかわからんでしょ、人には。鉄球持ってごそごそしてるだけでさ。たまにはふんどしになって、ごろごろ転がしたりするんだけど(笑)。基本的には、例えば地下道の所に座って、壁からぼたぼた落ちてくる水をずっと見ながら、その水の音を書き続けるのを1週間やるとかさ。

山岡: 書くって言うのはどうやって？

西島:ただ文字にして書く。「水の音」くらいな感じ。「ぼたりぼたり今落ちた」みたいな感じ。

山岡:ははは(笑)。

西島:そんな感じ。巻いた障子紙に、現象をただ書き続ける。どっかのおじいさんが毎日そこを掃除しに来てたから、その人といろいろ話したりしてた。その人の掃除は、ボランティア。ある時、顔を描いてくれて。僕が絵描きだっていう話をしてたから。顔を描いてあげたの、紙を破って。家に持って帰ったら、奥さんがこんなもんだでもらったらいかんつか言われたそうで、いくらだったかな、翌日2000円、持ってきた(笑)。僕は受取れんって言ったよ。そしたら、その代りにお菓子を毎日差し入れてくれた。寿司の差し入れとか、饅頭の差し入れとか。前橋はいいね(笑)。

山岡:あはははは(笑)。

西島:詩人と思われたかな。あそこ、萩原朔太郎の出身地でしょう? 道端で鉄球置いて、文字を書いとるだけで、詩人に見えたかも、「漂流する詩人」じゃないけど。僕、萩原朔太郎のことあんまり知らなかったのよ。たまたま自分が行為をやって、後ろにちっちゃい古本屋さんがあったので、中に入ってさ見たら、なんとなく気になったのが、小さい文庫本だけど、萩原朔太郎だったな、買った、なんかいいなあと思って。書き出したらね、すごいいいんだわ。やっぱり違うなと思った。それで僕がいろんな文章書いたわけ。当然のことながら、文章みたいなことを書くわけ。文章みたいかどうか知らんけど。一日中書き続けてるわけだから。障子紙を巻いていって、それにずっと書き連ねていく、そういう「行為」。たまに絵も入ったりするけど。基本的には文字で。

山岡:すごいわ。

西島:《音採取行為》っていうのはそういう風なこと。「何か書く」と決めちゃうと、抑圧みたいな、何か書かなくちゃいけないみたいになるでしょ。だけど音採集っていうのは人間テープレコーダーみたいになって、実際には音は採集できないんだけど、書くことはいっぱいあるわけ。自分の書ける筆の音とかさ、換気扇の音だとか、人が通り過ぎる音とか、音が無ければ無音とかさ。ずーっと延々と書くは、いくらでもある。そういう時間を費やすだけで。

山岡:……何かしらある。

西島:佐久島でも面白かったな。佐久島は、愛知県の知多半島の先にある離島で、三河湾のどこにある。松澤宥さんから電話があって、一緒にやらないかって。松澤さんもその時、参加したよ。土方巽の奥さんとかも。企画自体は、岡崎球子。

山岡:画廊がありましたね。

西島:その人が離島対策じゃないけど、そこ離島に住み込んで(笑)、助成金をもらって、それでやった展覧会(2000年、弁天サロンアートフェスティバル/弁天海港佐久島「生活と芸術」)。展覧会は、何回か続いたらしい。で、その時も、滞在型で1週間ごとに、島の中を移動しながら、1箇所は日の出から日没まで。その時は、《音採集行為》じゃなくて、その場所場所によって、採集行為ではあるけど、何か拾うっていう、ただそれだけ。ただ拾って置くとか、ただ拾って引掛けるとか、そういうのをやったんだけど。ある場所ではね、堤防があって、僕が下見に行った時にはね、奥の方まで岩がばーっと出てたのね。その岩の所の上でやる予定だったの。かなり沖まで岩が干上がって。それで、展覧会は始まってから行ったら、満潮と干潮の関係がずれとって(笑)、ずっと満潮なんだわ。これはまいったな、やることないなって思っ。ただ石を拾うっていうのは決めてあったの。だけどなあって思っ、見ると石がないの、全然。(笑)

山岡:全部水の中なんですか？

西島:水の中っていうか、ちょっと堤防降ると、少しあるけど。そこ降りてまた拾ってきて、堤防に並べることは一応はやったの。で、1日2日経って、石が順番にミニマルアートみたいな感じで(笑)、石積みみたいな感じでずっと並んでいくわけだけど。でも石が少なくて下に降りなきゃならんし、下降りても石がない。困ったなと思っながらも一応やってたの。

山岡:ええ、ええ。

西島:でね、島の中に自閉症の子たちのための小さな寄宿学校があっ、その人が、子供たちを連れてきていいかと聞いたので、いいよって言ったのね。で、生徒を15人くらいがやってきた。そして、僕のやってることは簡単なんで、方法だけ伝えた。方法というのはどういうことかという、石ころがあつたら石を頭でっかちにして、不安定な形で立てる。立たなかつたらしょうがないけど。安定のある状態で三角形ではなくて、ひっくり返して置くっていう。それはあんまり意味ないんだけど、とりあえずそういう約束事だけ作っ。だけどその辺は石ころがないから、参加しても困るだろうなとは思っ。そしたらね、その年の春に来たばかりの女の子なんだけど、まだ中学生の低学年ぐらいの感じの子。その子が、石ころをどんどん置き始めるのね。その石ころっていうのがね、すごく小さい石なんだわ。もう砂利なのね。それをこう、ずーっと置いてくのね。僕、もう、感動しちゃってね。僕は、石ころというのをある大きさに思い込んでいたけれど、そうか、こんな小さい石ころなら、いくらでも足元に転がってるじゃないかって。それでいくらでも置けるな、これで楽だなと思っ。

山岡:目からうろこ？

西島: 砂利って言えば、もう砂利。こんな小ちゃいやつ。これだったらいくらでもある。楽だと思って、楽勝で続けたんだけど(笑)。そして、その女の子のことを僕が褒めたことが、その女の子にすごい伝わったみたいで。次の日、その学校の先生に会った時、その女の子はその学校に来てから、一言もしゃべってなくて、僕の褒めた言葉がよっぽど嬉しかったのか、それからものすごく元気になりましたって(笑)。僕は治癒をしたのかしらって(笑)。

山岡: ふーむ。

西島: でも、どっちかって言うと、僕が本当に感動しちゃったのね。

山岡: 褒めてやろうと思ったわけでもなんでもありませんよ。

西島: 本当にきれいだったから。小ちゃいやつがね、夕日にひゅーってなって、細い影がシューとついてね、もうなんとも。それはたんなる個人の趣味かもしれんけど。あともう1つ、僕の採集行為には大事な方法がある。大抵何かを拾うっていうのは、見て選んで拾うでしょ。そうじゃなくて、僕の採集行為はパッと見て足元に、ここにあるやつを拾う。そうするとね、いろんなものが情報がいっぱいある。こんな髪の毛1本でも。大抵人が採集する時に、あそこに煙草が落ちてるとか、きれいな石が落ちてるとか……

山岡: 選んじゃう。

西島: 選んでから、拾いに行くでしょ。これはやってみると意外と面白い。えっ、こんなのかな、なんだろうこれはいったい、ようわからんけど、なんだろうな、と。だんだん想像を巡らせるのがおもしろい。無駄な事といっちゃ、そういうことなんだろうけど。それはいつでもできるしね。

山岡: 面白いです。

西島: それと、僕の仕事で大事ことのひとつ、《六四追悼儀》っていうのは、毎年やっている。大抵やる。六四っていうのは天安門事件の。あれの追悼をずっと僕は続けてるんだ。初めての海外旅行、香港に行った時に、その時ちょうど6月4日だったのよ。1998年に香港が返還された翌年だった。六四の追悼イベントがあって、感動したんだわ。香港の人たちと、参加していたフィリピンの人たちも含めて、みんなで集まって来て、蠟燭1本を持って、ただ立ってるだけ。何にも言わない、演説したりもない、ただ蠟燭持ってただ集まってくるだけ。その風景に、すごい感動して。「アパートへイト否」の時に岩田信市が、お前こんなアパートへイトなんかやってるより、今は天安門だろって言ったのね。でも、その時は、僕はどうもピンときてなかったの。あんまり情報がなかったのかな。

山岡: ふーむー。

西島: だけど、岩田信市はそういうのに、敏感なんだろうね。彼は自分自身のことをポップアートって言うけど、そういう普通の人の目というか、社会を見る目みたいのがあるよね。今、僕がトラック乗ってるのを、《行為〇〇思考》と言っているのも、それに関係している。僕がかつて「絵しか描いてません。絵を描く行為にすべてがある」みたいな、別に芸術至上主義ではないけど、そんなことを言ったら、ゼロ次元の加藤好弘に、それはだめだって言われたことがある。

瀬藤: 加藤さんが働けて言ったんですか。

西島: そうでなければ、世の中が見えてこないって。どこで世の中見るかっていったら、小さな職場とかそういう所で働くことから、世界が全部が見えてくると。そこに世界が集約されてる。なんかそういうようなことを言ったの。絵描きのような、絵ばかり描いてたら、絵バカになっちゃってだめ、必ず働きなさいって。でも僕は働くつもりなかった、ていうか稼いでいくつもりがなかった。花市場を辞めた後だったからね。今も「労働」について、加藤好弘の言った言葉を思い出す。エログロナンセンスだけじゃないんだよ、加藤さんは。そして、僕は、トラックに乗りながら、《行為〇〇思考》を続けている。「労働について」、書くつもりだよ。

山岡: はい！ 楽しみにしています。よろしくお願いします。